

## 研究ノート

『革命的東トルキスタン』紙のタタール人記者  
ムニール・イブラギモヴィチ・イエルズイン回想録

水谷 尚子\*

## 要 旨

ムニール・イブラギモヴィチ・イエルズイン氏〔Munir Ibragimovich Yerzin〕は1927年、現在の中華人民共和国新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州アルタイ地区ブルチン〔布爾津〕に生まれたタタール人である。氏は母語のタタール語のほか、迪化師範学校〔迪化はウルムチの旧名〕で漢語を、職場でウイグル語を習得し、さらに生活の中でカザフ語とロシア語を身につけた他言語を操るポリグロットで、その卓越した語学力を生かし、長くジャーナリズムや学術の世界で活躍した。

1947年5月に新疆省立迪化師範学校を卒業すると、『新疆日報』社に職を得たものの同年8月に辞し、グルジャ〔中国名イリ〕に赴いて、「東トルキスタン共和国」(所謂イリ・タルバガタイ・アルタイの三区)の主張を伝える官報『革命的東トルキスタン紙〔インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズイティ Inqilabi Sharqi Turkistan Gaziti〕』に転職し、この地域が中国共産党の実効支配を受ける1949年10月まで、記者兼漢語翻訳者として勤務した。

新疆が中華人民共和国支配下となつてからは『伊犁日報〔イリ・ガズイティ Ili Gaziti〕』の記者となつたが、三反五反運動を体験して中国の政治動乱に不安を感じ、1955年ソ連のアルマ・アタ〔現アルマトイ〕に一家で移住。ソ連では、1960年から新聞『共産主義の旗〔コムニズム・トゥギ・ガズイティ Communism tughi Gaziti〕』ウイグル語版編集部勤務した。1967年からはカザフスタン科学アカデミー下の言語学院ウイグル語研究室に転属となり、ウイグル語印刷出版物史を研究し、『ウイグル語ソヴィエト印刷物史〔Uyghur Sovit Metbu'atinin Tarihi〕』などの著作を記している。

本稿はムニール氏の口述証言に、新疆近現代史の観点から、解題を行ったものである。氏の口述証言では、三区「東トルキスタン共和国」政府が刊行していた官報の編集出版状況や、三区側と新疆省国民政府系メディアとの関係が詳細に明かされており、これらは他の文献に類例がなく、当時の新聞雑誌を読み解く際の一助となるであろう。

## キーワード

東トルキスタン共和国、三区革命、新疆省連合政府、『インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズイティ』、新聞史、ウイグル、タタール

---

\* 執筆者：水谷尚子

所属/職位：中央大学経済学部/兼任講師

連絡先：〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

E-mail：QYH10040@nifty.ne.jp

## ムニール・イェルズィン氏



## ○史料解題～「東トルキスタン共和国」首脳部を知る新聞記者の口述記録

本稿は、「東トルキスタン共和国」の公報『革命的東トルキスタン』で新聞記者兼漢語翻訳をしていたムニール・イブラギモヴィチ・イェルズィン〔Munir Ibragimovich Yerzin〕氏の口述記録である。

ムニール氏は1927年、現在の中華人民共和国新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州アルタイ地区ブルチン〔布爾津〕に生まれたテュルク系民族タタル人である。氏は母語のタタル語のほか、新疆省立迪化師範学校〔迪化はウルムチの旧名〕で漢語を、職場でウイグル語を習得し、さらに生活の中でカザフ語とロシア語を身につけた他言語を操るポリグロットで、その卓越した語学力を生かし、長くジャーナリズムや学術の世界で活躍した。

1947年5月に迪化師範学校を卒業すると、『新疆日報』社に職を得たものの同年8月に辞し、グルジャ〔中国名イリ〕に赴いて「東トルキスタン共和国」(所謂イリ・タルバガタイ・アルタイの「三区」)の主張を伝える官報『革命的東トルキスタン紙〔インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズィティ *Inqilabi Sharqi Turkistan Gaziti*〕』に転職し、この地域が中国共産党の実効支配を受ける1949年10月まで、記者兼漢語翻訳者として勤務した。

新疆が中華人民共和国支配下となつてからは『伊犁日報〔イリ・ガズィティ *Ili Gaziti*〕』の記者となったが、三反五反運動を体験して中国の政治動乱に不安を感じ、1955年ソ連のアルマ・アタ〔現アルマトイ〕に一家で移住。ソ連では、1960年から新聞『共産主義の旗〔コムニニズム・トゥギ・ガズィティ *Communism tugh'i Gaziti*〕』ウイグル語版編集部勤務した。1967年からはカザフスタン科学アカデミー下の言語学院ウイグル語研究室に転属となり、ウイグル語印刷出版物史を研究し、『ウイグル語ソヴィエト印刷物史〔Uyghur Sovit Metbu'atinin

Tarihi]』（後述）などの著作を記している。

## I. 聞き取り調査に至る経緯と活字化方法

筆者は2009、10年の夏、中央アジアのカザフスタン・キルギス共和国・ウズベキスタン3ヶ国に於いて「ウイグル人の在外組織とその活動」をテーマにフィールドワークを行なう過程で、中国新疆北部〔北疆〕に生まれた80歳を超える老人たちの口述史を収集する機会を得た。故郷の地が中華民国新疆省、「東トルキスタン共和国」、新疆省連合政府、中華人民共和国統治下と変遷する様を見続けてきた彼らは、新疆ウイグル自治区が成立した前後の1950～60年代、中国領から旧ソ連領に、移住もしくは亡命することを選択した。中央アジアで出会ったこうした高齢者の中で筆者が特に興味を覚えたのは、流暢な漢語を操るウイグル人、ウズベク人、タタール人などテュルク系民族の知識人たちであった。彼らはその優れた漢語能力ゆえに、何らかの形で「中国や漢人」と深く関わってきた経歴を有する。ムニール氏も、そんな一人であった。

ムニール氏の「語り」は、2009年9月8日、2010年9月2、3日、アルマトイのご自宅で、長時間にわたって筆者がICレコーダーを回した、その記録である。氏の口述は基本的に漢語で、時にウイグル語やロシア語を交え、記録収集はインタビュー形式ではなく、時代順に氏の歩んできた歷程を自由に話して頂き、不明な点を後で問う形で行った。さらに、聞き取り録音には含まれていないが、氏の自伝的著作『祖先たちの道を－書き記された物語（ウミット出版社、カザフスタン・アルマトイ、2005年、ロシア語）〔Ерзин Мунир, “Тропую предков: документальное повествование” изд. «Уміт», Алматы, 2005〕〕「第2部 遠い道」に触れられている事柄で興味深い内容は、引用が分かる形で文章に反映させることとした。また、読者に時代背景がわかりやすいよう、所々に説明をそれと分かる形で加えた。

## II. 新疆近代史と「東トルキスタン共和国」

次に、近代に於ける新疆史の流れについて、簡単に述べておきたい。

現在の中華人民共和国新疆ウイグル自治区あたりを漢語で「新疆〔新領地の意〕」と呼称するようになったのは、清国乾隆帝の治世より以降のことである。清国は、1755年ジュンガル王国の根拠地であったイリに侵攻して同国を滅ぼし、1758年にはタリム盆地も征服して、1762年イリ地域に新疆支配の最高責任者「イリ将軍」を置いて、この地の実効支配を始めた。

1911年の辛亥革命で清朝が倒れて中華民国が誕生すると、国の統治者層は満人から漢人へ変わったものの領土はそのまま引き継がれ、イリ将軍や巡撫などの官職が廃止となり、新たに「四庁一署」を設置、清国科挙進士であった楊增新が中華民国初代新疆省省長に任命された。楊増新は新疆を自らの王国のように統治したが、部下であった樊耀南が起こしたクーデターで殺害され、このクーデターの鎮圧者である金樹仁が、1928年省長に就任する。この頃から新疆の主体民族であるテュルク系ムスリムは、漢人の独裁統治打倒を掲げて武装蜂起を頻繁に起こ

すようになった。

1933年11月南新疆カシュガルでは、ウイグル人の民族主義者らが「東トルキスタン・イスラーム共和国」の建国宣言を行って民族国家の建設を試みたものの、国際的認知を得られず、省政府側の圧倒的軍事力に屈してわずか数ヶ月で壊滅した。「東トルキスタン・イスラーム共和国」を崩壊に導いた盛世才が1934年に新疆省長となってからも、漢人の官僚職独占と漢人中心の統治体制は変わることなく、テュルク系ムスリムの武装反乱は止むことはなかった。そして第二次大戦末期の1944年11月、北新疆イリ〔ウイグル語でグルジャ〕ではソ連の強い影響下に、ウイグル人やその他のテュルク系民族、さらに東干〔ドゥンガン〕などのムスリムによって、再び「東トルキスタン共和国」の建国が宣言された。

### Ⅲ. 「東トルキスタン共和国」に関する史資料公開状況と、ムニール氏口述記録の意義

テュルク系民族のエスノ・ナショナリズムの発現と見なされる「東トルキスタン共和国」についての歴史研究は、中国では文献史資料の閲覧に厳しい制約があることから、実証的アプローチが極めて困難であると言っても過言ではない。一例を挙げると、謝敏という漢人名で記されたアフメドジャン・カスムの小伝「三区革命的卓越領導人 阿合買提江・カス米烈士伝〔三区革命の卓越した指導者アフメドジャン・カスム伝〕」（後述）には、奥付に「イリ檔案館所蔵の東トルキスタン共和国政府委員会の会議決議録から引用した」という注釈が散見されるが、一部の中国籍研究者を除いて、外国人の研究者がイリ檔案館を訪れ、同館に収蔵されている東トルキスタン共和国時代の文献資料を手にすることは、現在の中国の政治体制下では絶望的と言わざるを得ない。

公文書を観閲するのが困難ならば、個人への口述収集というフィールドワーク的アプローチ方法もあるが、この作業も最早遅きに逸した感がある。1940年代の新疆を知る書き手・語り手のほとんどが、既に鬼籍に入っているからだ。

中国では1980年代以降、ブルハンやサイフディンら「東トルキスタン共和国」時代を知る著名人の回想録（後述）、アバソフらこの時代の政治家の伝記や小伝（後述）、民族軍に従軍した軍人の回想～例えば託合提・伊布拉音〔トフティ・イブライム〕が記した『關於民族軍的回憶録』（新疆人民出版社 2002年 本文はウイグル語）等が出版されている。だが三区を知る人々による著作は思いのほか少なく、翻って漢人の中国共産黨員や中華民国官僚による回想はそれに比べると多く、歴史経緯の重要性に相対してテュルク系民族、若しくは三区側の証言収集は不十分な感がある。

公文書への「アクセスの悪さ」の原因として、この地が1949年中華人民共和国の実効支配を受けるようになって以来、ウイグル人による反政府運動が断続的に発生していることが背景の一つに挙げられよう。ウイグル人研究者の中には、ウルムチ市檔案館の目録をコピーして国外に持ち出そうとしたとして、スパイ容疑をかけられ「国家機密不正取得罪」で投獄された者さ

え存在する。中国政府はウイグル人による民族主義の高揚を恐れて、このような措置を執っていると推察される。さらに、文化大革命時の自白強要と政治運動による階級闘争の苦い経験から、民間では「昔語り」をすることが政治迫害に繋がりがねないと恐れられ、口述史収集も進まなかった。

他方で、新疆に次いで三区の政治を知る人々が多い中央アジアでも、ソ連時代は「東トルキスタン共和国」に関する口述や自伝の類を刊行するには制約があったようだ。たとえば、イリハン・トレは1966年から1973年の間に『トルキスタンの悲哀』〔Алихонтўра Соғуний, ТУРКИСТОН ҚАЙҒУСИ, «Шарк» нашриёт-мағбаа, акциядорлик компанияси, Бош тарихирияти, Ташкент 2003.〕と題した回想録を書き残し、原稿はソ連邦崩壊後の2003年になって、ようやくウズベキスタン・タシュケントでキリル文字表記のウズベク語で刊行されたが、これは原稿前半部分のみの刊行で、後半部分は刊行されずじまいである。

エイサ・アルプテキンやムハンマドイミン・ボグラらのウイグル人が政治亡命したトルコでは、トルコ語で亡命者の回想録が出版されている（例えば İsa Yusuf Alptekin'in Mücadele Hatıraları Doğu Türkistan İçin- 1,2）。ただ、1950年代にトルコや中東へ渡った政治亡命者は、中華民国の官僚や資本家であった人々が中心で、従って彼らの著作には、三区側に関する記述は多くはない。

以上のとおり、著しく資料閲覧が限定されている現状を鑑みるに、「東トルキスタン共和国」時代、政権中枢に割と近い所において、記憶力が確かで、自伝も書き残していたムニール氏の口述証言は、新疆近現代史を考察する上で示唆に富み、とりわけ三区や迪化における新聞刊行状況についての叙述と、「東トルキスタン共和国」政権に纏わるメディア工作の実態に関するデータは、実体験に基づく他に類例を見ない貴重なものであると言える。

本稿が「東トルキスタン共和国」史研究の一助となれば幸いである。（以下、本文は敬称略とする）

## 〔ムニール・イェルズィン回想録〕

### ●美しい故郷ブルチンで過ごした幼年時代

名前はムニール・イブラギモヴィチ・イェルズィン。1927年、アルタイ地区ブルチン生まれです。私は上から3番目の子で、兄弟姉妹は兄・姉・私・妹・弟・妹と6人も居ました。早くに父イブラヒムを亡くしましたから、母のファルザン・シディック・カズィと私を含めた6人の兄弟姉妹たちは、商売人だった父方の祖父ハリル・ムハマドグレィ・ハジに養われました。祖父は厳格ながらも慈愛に満ちた人でした。私たちの故郷ブルチンの町は、イルティシュ河とブルチン河の合流地点に近く、町の北と西には広大な森林があり山河自然の幸豊かで、このお

伽倻に出てくるような美しい郷土を、私はとても愛していました。

1940年夏、13歳の時、町にウルムチの学校から学生選抜担当者がやってきました。教育熱心な祖父は、「ここにいても大した教育は受けさせてやれない。良い機会だ。ウルムチに行ってしっかり勉強してきなさい」と強く勧めました。アルタイ地区からは20名を超える生徒が選ばれ、内訳はタタール人の私、モンゴル人が3名、残りはカザフ人という面子で、私は同じテュルク系民族「カザフ人枠」での選抜だったようです。

引率の先生とともに無蓋のトラックに乗せられ、1,000キロ彼方のウルムチまで2泊の道のりを、母が縫ってくれた上着と道中の食べ物、祖父の饞別を握りしめて旅だちました。子供の頃、ブルチンでの暮らしはずっと続いていくのだと何ら疑いも持たなかったけれど、実際にはこの日から、郷里を遠く離れ、故郷には戻れない私の人生が始まったのです。

#### 【解説1】1940年代前半のアルタイ地区

ムニールがウルムチに発つ約半年前の1940年2月、アルタイ地区コクトカイでは、カザフ人による大規模な反政府暴動が起こり、一旦収束したものの1941年に再燃している。当時新疆を支配していた軍閥の盛世才は、遊牧を糧とするアルタイ地区のカザフ人に銃馬の供出を強要したり、地元名士を様々な理由で逮捕してその勢力を削ぐなどの圧政を繰り返しており<sup>(注1)</sup>、のちの筆者の質問に、ムニール自身「愛情豊かだったあの祖父が、幼い私をウルムチの学校に送り出したのは、政情不安と治安悪化が顕著であったアルタイ地区の情勢を懸念して、比較的安全な省都に私だけでも逃れさせたかったのかもしれない」と述懐している。この地ではその後、武器供与などソ連の援助を得たカザフ人首領オスマン・イスラムが1943年12月「アルタイ・カザフ民族復興委員会」を、1944年10月には「アルタイ民族革命臨時政府」を樹立させ、カザフ人の民族運動を主導していった。オスマンは民族主義者からは「オスマン・バートル〔英雄のオスマン〕」と呼ばれている。

#### ●ウルムチで学ぶ～モンゴル・カザフ学堂から省立迪化師範学校漢語学科へ～

私たちが入学したのは省立迪化師範学校付属の寄宿制中等教育機関で、現在の中学・高校に相当し、「モンゴル・カザフ学堂」の名称で呼ばれていました。この学校にはアルタイ地区のみならず、タルバガタイ地区やコムル、ウルムチ出身のモンゴル人・カザフ人の生徒が学んでいて、私はコムルのバルコルから来たカザフ人の子たちと仲良くなりました。彼らは1930年代にバルコルで起こったカザフ人蜂起について、事細かに教えてくれました。

(注1) 『新疆三区革命史』(新疆三区革命編纂委員会編 民族出版社 1998年 19-21頁)

学校の寄宿舎は、1日2回の食事は無料で、夏冬の衣服や教科書・文具は支給されたけど、靴や細々した日用品は自費で購入するきまりでした。1940年以後アルタイでは反乱勢力と盛世才軍との衝突が続き、アルタイ〜ウルムチ間の交通が途絶して、私には実家からの仕送りが届きませんでした。他地域から来ている生徒は、家からの援助を滞りなく受けとっていたのに、食べ盛りだったこともあって、本当に空腹が辛かった。生活に困った私は夏休みに現金収入を得ようと、ウルムチ市内でくず鉄拾いなどのアルバイトをしました。手に入れた小銭でパンやピロシキを買って、腹を満たしたものです。

2年生になると生徒のうち、政府関連の職を希望する者や、軍人になろうとする者は転校して行きました。そのような道を選ぶと、奨学金や食事などの待遇面で条件がよい事を私は知っていましたけれど、それでも学校に残って、毎日4時間カザフ語の、2時間漢語の授業を受け続けました。語学学習が好きだったのです。学校で1番の友達はモンゴル人のバタとソ連領出身のモンゴル系カルムイク人のネムジュダルで、バタからはモンゴル語を、ネムジュダルからはチベット仏教について教えてもらいました。

「モンゴル・カザフ学堂」を卒業すると省立迪化師範学校漢語学科に進学し、4年間そこで学びました。漢語学科の新入生は53人で、漢人が49人、あとはタタール人の私と1人のカザフ人、2人のモンゴル人でした。教員は全員が漢人で、授業は漢語で行われました。

師範学校にはウイグル語学科やカザフ語学科もあり、私たちとは別に教育を受けていました。ウイグル語学科には省南部から来たウイグル人学生が大勢いて、ウイグル語で授業を受けていました。学生総数は400名を超えていました。様々な民族の学生が集う学校でしたから、放課後スポーツ試合でも行おうものなら声援がヒートして、民族差別的な罵声が飛び交う場となることもありました。

この学校の宿舎は建物がボロボロで、冬場は酷寒地だというのに碌な暖房設備もなく、冬季に風呂は月1回しか入れませんでした。食事も質素というより粗末で、相変わらず自宅からの仕送りは届かず、私の生活は更に悪化しました。

休暇になると少しでも収入を得るために、アルバイトの口を探しました。煉瓦工場、発電所の建設現場、銀行など様々な所で働きました。山東省出身の高さんという漢人の口利きで、ウルムチの磁器製造工場で働いたことは特に印象深く心に残っています。粘土をこね、レンガを運搬する仕事でした。この工場がくれた日当は私には十分すぎる額で、ここで私は「自分の手で自分の食い扶持を稼ぐこと」の素晴らしさと大切さを、身を以て学びました。高さんには、山東方言の漢語を教えてもらいました。

すべてを勉学に注ぎ込む…私はこの規則を守った。先生方への絶えざる敬意とともに、私は1日も怠ることなく、1時間も無駄にすることなく勉強した。町に出れば漢語で書かれた看板を残らず読み、壁の落書きを読み、知らない漢字があればメモして帰ってから教員

にたずねた。先生方は～なかでも漢語担当であった楊先生は～、私の努力をおおいに支援してくれた。(自伝78-79頁)

### 【解説2】蒙哈学堂と省立迪化師範学校

ムニールが進学した「蒙哈学堂〔モンゴル・カザフ学堂〕」は、盛世才時代の1936年9月、中華民国新疆省教育庁が制定した「蒙哈特別班章程(モンゴル・カザフ人生徒特別クラスについての方針)」によって、省立迪化師範学校の付属施設として設立された教育機関である。衣食住諸費は省政府予算から支出された。当初は「蒙哈特別班〔モンゴル・カザフ特別クラス〕」と称されたが、1937年から「蒙哈学堂」と呼ばれた。モンゴルクラスとカザフクラスがあり、各クラスの生徒数は約40名。3年制。学科にはモンゴル語、カザフ語、算数、国語、農業牧畜知識、教育学、歴史、地理、工芸、体育、音楽、美術、生物学、ロシア語などがあったという<sup>(注2)</sup>。

「省立迪化師範学校」の起源は清末1906年、新疆巡撫(省の民政軍政長官)の聯魁が「新疆初級師範学堂」を設けたことに始まる。中華民国期に入り楊增新時代の初期に師範学堂は閉鎖されたが、1916年北洋政府教育部の指導で2年制初級師範学堂が再興され、1924年に4年制の「省立師範学校」となる。盛世才時代になり1934年に「省立迪化師範学校」と改名した<sup>(注3)</sup>。当時のウルムチでは「新疆学院」と並ぶ最高教育機関であった。

### 【解説3】1940年代半ば頃までの新疆政情

ここでムニールが学生生活を送った頃の、めまぐるしく変動した新疆政治情勢について、簡単に述べておきたい<sup>(注4)</sup>。

1931年に発生したコムルに於けるテュルク系ムスリムの反乱事件以降、各地で連鎖的に蜂起が発生し、新疆を統治していた金樹仁は1933年4月のクーデターで追放された。当時国民革命軍の参謀であった軍人盛世才は、反乱軍による金樹仁追放を事後になってから「支持」し、省政府内で軍事力を背景に発言力を強め、第二政変で政敵たちを暗殺して、1934年省政府での実権を掌握した。だが、ムスリムの反乱を完全に鎮圧できず窮地に立たされ、やむなくソ連に援助を仰いで、かろうじて省全域への権力を確保し、それからは11年間に渡って新疆を支配した。統治初期はソ連の圧倒的影響下で親ソ・親中共路線を採り、民族文化尊重などの「善政」を敷

(注2) 『新疆教育大事記』(『新疆教育年鑑』編纂室編 新疆教育出版社 1999年 25頁)

(注3) 『新疆教育大事記』(『新疆教育年鑑』編纂室編 新疆教育出版社 1999年 10・15・17頁等)

(注4) 参考:『民国新疆史』(陳慧生、陳超著 新疆人民出版社 1999年)、『新疆三区革命大事記』(新疆三区革命編纂委員会編 新疆人民出版社 1994年)、『天山雄鷹-阿布杜克力木・阿巴索夫〔アブドゥケリム・アバソフ〕生平』(賽福鼎〔サイフディン・エズィズィ〕著 中国文史出版社 1987年)

いたものの、スターリンの肅正に乗じて、意に沿わぬテュルク系官僚や漢人官吏を投獄・処刑にするなど、すぐに独裁色を強めた。

1941年、中華民国政府が新疆に国民政府軍の進駐を実現させ、国民党中央が直に新疆政治に参与する姿勢を見せると、盛世才は再びソ連への接近を計り、援助を期待するものの失敗し、重慶の蒋介石総統からの圧力によって1944年新疆を去った。

替わって国民政府が新疆省主席に任命したのは、国民政府の民族問題を扱う機関「蒙藏委員会」の元委員長・呉忠信だった。呉の着任からまもなくの1944年10月、テュルク系諸民族の反政府武装組織がソ連の軍事的援助を得て蜂起し、イリ地区ニルカを陥落させた。この事件はイリ、アルタイ、タルバガタイ三区における「東トルキスタン共和国」建国～所謂「三区革命」～への直接的引き金となり、同年11月7日にはイリ地区の首邑グルジャが勢いづいた蜂起側の手に落ちた。

1944年11月12日グルジャの民族解放組織は東トルキスタン共和国政府樹立を宣言し、政府主席にウズベク人イリハン・トレ（1885-1976）を選んだ。彼は1929年にソ連トクマク（現キルギス共和国の首都ビシュケク近郊）からグルジャへ移り住んだウラマー（イスラーム宗教指導者）で、ブハラ（現ウズベキスタン）で学んだ人物である。

日中戦争のさなかの中華民国国民政府は、この動きを阻止する軍事力も交渉力もなかったが、戦争終結直前1945年8月13日、中華民国は東トルキスタン共和国の実質バックボーンであったソ連と「中ソ友好同盟条約」を締結。同年9月、軍事委員会政治部長・張治中を新疆問題調査のためウルムチに派遣し、張は駐ウルムチのソ連総領事と面会して、解決策を模索し始めた。

1946年1月、中華民国国民政府と東トルキスタン共和国政府は「11ヶ条の和平協定」を締結。ソ連と中華民国は三区側に、「中央政府代表と新疆暴動区域人民代表との間で、平和的方法によって武装衝突を解決するための条項」との一文を承認させ、あくまで国家間交渉であるとの姿勢を貫きたかった東トルキスタン共和国政府側に打撃を与えた。なお新疆省主席呉忠信は、同年3月に在任期間1年半ほどで辞職している。

和平協定締結後も国民政府と東トルキスタン共和国側は、民族軍再編方法を巡って激しく対立し硬直状態が続いたが、1946年6月6日この問題に関する附文への調印が成り、同年7月1日を以て「新疆省連合政府」が発足した。この間の6月中旬、東トルキスタン共和国大統領にしてイスラーム教の宗教指導者イリハン・トレが、武装した何者かによってグルジャからソ連邦カザフのコログラスへと連れ去られ、グルジャに戻って来ないという事件が発生。これ以降、三区ではアフメドジャン・カスムとアブドゥケリム・アバソフ（1921-1949）が政治の全権を掌握した。アフメドジャンはグルジャ出身のウイグル人で、モスクワの大学に学んだソ連共産党員である。アブドゥケリム・アバソフはアトウシュ出身のウイグル人で漢語が堪能、妻は漢人で「親中国共産党派」と言われている。ムニールによると「アバソフの周辺の人々は、彼の妻である呂素新をアラハヌムとウイグル語名で呼んでいた」という。

新疆省連合政府発足により「東トルキスタン共和国」は解消し、連合政府主席には張治中、副主席にはアフメドジャン・カスムとブルハン・シャヒーディーが就任した。張治中は新疆に来る前は軍人で、1946年3月より軍事委員会委員長西北行轅主任。ブルハンはソ連カザン（現ロシア連邦タタールスタン）出身でドイツ・ベルリン大学に学んだ人物である<sup>(注5)</sup>。ムニールら複数の三区政治関係者の証言によると「ブルハンはタタール人」との事だが、中国刊行の書籍には「ウイグル人」と記されている。

### ●ウルムチの新聞社『新疆日報〔シンジャン・ガズィティ〕』への就職

1947年5月、私は迪化師範学校を卒業しました。大学当局から南京政治大学への進学を勧められたのですが、いろいろと「心にかかる事」が多く、断りました。学校に残って教員をしないかという話もあり、進路について悩んでいたある日のこと。私は路上でかつて煉瓦工場と一緒にアルバイトをしたウイグル人の友人オルハン・サイラニに出会い、家に食事に誘われました。盛世才時代に思想問題で逮捕され、監獄に捕らわれていた彼の兄、ウイグル・サイラニの出所祝いだといいます。

オルハンの父、ハイダル・サイラニはタタール人で、新疆では大変著名な教育者で、ジャーナリストでもありました。ハイダルの最初の妻はウイグル人で、その長子がウイグル・サイラニです。この妻がトルファンで亡くなってから後妻となったのがブルハン・シャヒーディーの妹で、この後妻の長男がオルハン、その弟は現在、新疆計量研究所の所長をしているイリチ・サイラニ〔伊里奇・薩依然〕です。気の毒なことに友人のオルハンは、文化大革命時に命を落としたと聞きました。

オルハンの家で初めて出会ったウイグル・サイラニは、私が師範学校で漢語を学んでいたと知ると、隣の部屋から漢語で書かれた新聞を持ってきて「カザフ語に訳してみなさい」と命じました。読みながら逐次訳すると、しばらくして「上出来じゃないか」と褒めてくれ、「きみ、これから就職はどうするつもりなの？」と尋ねました。答えに窮していると、彼は次のように続けました。「1946年7月末から『新疆日報』紙は新疆省連合政府管轄の活字出版部門となりました。アフメドジャン・カスムは11ヶ条和平協定第6条「出版・集会・言論の自由に関する条文」に基づいて国民政府に出版局体制の改編を要請し、この新聞のウイグル語及びカザフ語部門は新しい組織になり、私はそこの責任者兼編集長の職に就任しました」「通訳翻訳者として、うちの編集部のウイグル語部門で働きませんか。うちに来れば故郷のアルタイ地区だってそのうち行ける。明日にでも荷物をまとめて来なさい。宿泊所もあるから」。

(注5) 『新疆五十年』（包爾漢〔ブルハン・シャヒーディー〕著 文史資料出版社 1984年）

「だって私、ウイグル語知りませんよ」、「君ならすぐに覚えるさ」と、彼は動じる様子もなかった。私は翌朝、布団と身の回り一式を抱えて、編集部のある建物の一室へと引っ越した。（自伝84頁）

私はサイラニの紹介で、1947年5月『新疆日報』紙のウイグル語版編集部に通訳翻訳者として雇われました。サイラニが私を雇ってくれたのには理由がありました。当時『新疆日報』で漢語ができる翻訳者は、国民党側の人間とみなされた者ばかりでした。したがって国民党とは何も関係がなく、漢語会話と筆記の両方が確実にできる翻訳者が編集部ではどうしても早急にほしかったのです。ウイグル語版の編集責任者はトゥルスン・イスライという三区政府から任命された人物でした。カザフ語版の責任者はタタール人のハリム・ヴァリエフ。彼は博識で、筆が立つ人物でした。

入社後まもなく「ウイグル語ができない者がどうしてウイグル語通訳の肩書きで雇われているのか」と、編集部員間で批判が起こりました。この時は編集長サイラニの擁護で事なきを得たものの、私はサイラニに申し訳なくて、それからは手製の「漢語－ウイグル語辞典」を作成してウイグル語の勉強に没頭しました。サイラニは、編集部で働くもう1人のウイグル語通訳翻訳者のタタール人、アフマツ・タヒリに「ウイグル語をムニールに教えてくれ」と頼んでくれました。こうして2ヶ月ほどで長文論説を翻訳できるまでになり、私の翻訳は紙面に採用され始め、やがてカザフ語版の翻訳にも当たるようになりました。

アフマツ・タヒリは、ウイグル語と漢語だけでなくアラビア語、ペルシャ語にも堪能で、私は彼から多くのことを学びました。しかしアフマツは編集部内では「政治的に東トルキスタン政府側に立つ者でない」と見なされており、冷遇されている存在でした。

「私が西洋の記事を翻訳しても、上は新聞に掲載しない。ソ連の立場を弁護したものばかりを載せたがる。私の翻訳はもう長いこと紙面を飾っていない」。そう彼は私に言った。私はのちに、アフマツ・タヒリは（ウイグル語書籍）『（新疆）省史』の著者ポラツト・カーディリの娘婿だと人づてに聞いた。ポラツト・カーディリは1940年代末にトルコに移住した。（自伝87頁）

（新編集部が設立されて）発行が始まった当初から、ウイグル語とカザフ語版の『新疆日報』は、東トルキスタン共和国政府に対する誹謗中傷を許さないという性質のものだった。三区における革命的蜂起を肯定的に評価し、その意義を宣伝する文章や資料を発表した。「11ヶ条和平協定」の不可侵性を標榜し、その遵守を声高に訴えた。残る7地区における人民の苦しい生活や、彼らの自由をもとめる闘いを報じ、国民政府の軍人や警察官による地元住民への横暴・犯罪を告発した。（自伝88頁）

『新疆日報』の漢語版と、ウイグル語とカザフ語版は、連合政府が発足して新体制の編集部が誕生した1946年7月から、新編集部が解散に追い込まれる1948年8月まで、記事に書かれる内容が全く違うことになりました。漢語版は国民政府寄りの記事が、ウイグル語とカザフ語版は三区側の宣伝が掲載され、異なる会社の新聞となったのです。

#### 【解説4】新疆日報について

『新疆日報』の創刊日については諸説あるが、1930年代半ばのウルムチで、経費一切を新疆省政府財政庁が負担する新疆省政府機関紙として創刊したのは、確かなようである<sup>(注6)</sup>。編集方針は当時新疆で専制を敷いていた盛世才の統制指導を受けたため、盛の政治姿勢が変化するたびに紙面作りも変化した。1930年代後半、盛世才が親ソ路線を標榜した時期は、ソ連タス通信や延安新華社が配信する記事を多く使い、1942年盛が国民政府寄りの政策を執ると、国民党党宣伝部から総編集長が派遣され、のちに盛が政争に敗れると、盛の手を離れて国民政府中央直属の対新疆工作機関となった<sup>(注7)</sup>。

三区と国民政府による新疆省連合政府成立後の『新疆日報』について、ムニールと同時期、漢語版『新疆日報』に勤務した李帆群も回想を残しており<sup>(注7)</sup>、それによると、「(和平協定締結後)三区の代表は『新疆日報』ウイグル語版を独立させ、別会社にしたいと要求」し、「一切の設備を公平に分けるとの原則の下、激烈な争いがあり」「(その争いの最中)1946年冬、火災が発生して植字室や印刷室が焼けて甚大な損害を被った」。「この事件後、新聞は2つに分かれ、漢語版は国民党の手中に、ウイグル語版・カザフ語版は三区の手中となった」と記している。

同紙の紙面は漢語・ウイグル・カザフ・ロシア語版の3種が発行され、のちにモンゴル語版が加わった。また、新疆省連合政府時代は三区側にシボ語も加わり、6言語で出版された。支局はイリ、アルタイ、チョチュク、アクス、カシュガル、ホタンなどに設けられ、各地でそれぞれの支局版が発行され、発行頻度は隔日か3日おきだった。また、支局ごとに発行される文字版は違っており、例えばイリではウイグル語、カザフ語、漢語の3種類が発行された。記事は、新疆省連合政府が存在した時期以外は、各文字版で大凡同じ内容で、各支局を指導する迪化総局から配信される政府宣伝や企画記事以外は、地元のニュースを優先させて掲載したという<sup>(注6)</sup>。

(注6) 『中国少数民族新聞伝播通史 上』(白潤生主編 中央民族大学出版社 2008年 322-345頁)

(注7) 李帆群著「国民党統治時期的《新疆日報》」(中国人民政治協商会議新疆ウイグル自治区委員会文史資料委員会編 『新疆文史資料選輯(漢語版) 第2輯』 1979年 74-91頁)

## ●私が見た国民政府のウイグル人官僚

1945年9月13日、張治中は、国民党のウイグル人官僚マスード・サブリ（1888-1950）、エイサ・ユスブ・アルプテキン（1909-1995）、ムハンマドイミン・ボグラ（1898-1964）とともに、飛行機で新疆に来ました<sup>(注8)</sup>。中華民国側は、「東トルキスタン共和国の建国運動」を牽制し、新疆を中国領土内に保全するため、あの手この手を考えましたがなかなかうまくいかず、新疆最大のマジョリティであるウイグル人を高級官僚に仕立て、彼らを協力者として利用しようと試みたわけです。エイサらは自らを「中国系トルキスタン人」と呼び、三区側の人間は、マスード、エイサ、ムハンマドイミンの諸氏を指して“3紳士”と呼んでいました。

私は何度か、彼らをじかにこの眼で見たことがあります。1947年のことでした。エイサのアルタイ出版社と私たち『新疆日報』編集部は、それほど遠くないところにあり、同じ南梁街には八路軍駐新疆弁事処やロシア人クラブ、米英の大使館などもありました。ですから街を歩いていて、エイサたちとすれ違うこともあったのです。

エイサは「エイサ・ベク」と呼ばれていて、カシュガル地区イェンギサル県の生まれ。背が高く、体格がよく、堂々とした風采の持ち主で男前。雄弁でもあり、カシュガル方言のウイグル語で話していました。『東トルキスタン史』の著者ムハンマドイミンは、南新疆のホタン地区ロブ生まれ。小柄で温和しい人物で、周囲から「教師（先生）」と呼ばれていました。ボグラの妻アミナハンは、西洋の衣装を身にまとったインテリ婦人でした。マスードはいつも西洋風の服装をしていて、その姿は痩せているというより、痩せこけているという感じでした。会話にはトルコ語の単語がしきりに出てきます。彼はグルジャ生まれでしたが、トルコに留学経験がありました。余談ですが、ラヒムジャン・サビル・ハジ〔ロシア語名：サビルハジエフ〕は、

(注8) : 海威爾・鉄木耳〔ヘヴェル・トゥムル〕が記した「阿爾泰出版社及其他」（中国人民政治協商會議新疆ウイグル自治区委員会文史資料委員会編『新疆文史資料選輯（漢語版）第11輯』1982年 97-105頁）には、「1946年初頭、3人がウルムチにやってきた」との記述がある。しかし、ムニールはここで「1945年9月、張治中がマスード、エイサ、ムハンマドイミンとともに新疆に来た」と語っている。これは、1945年には国民政府内でウイグル人官僚の処遇が決まっておらず、彼らは一旦「内地」に戻って、交渉成立後の1946年に再びウルムチ入りを果たした、という事であるらしい（参照：ポラット・カーディリ〔Polat Qadir〕著『オルケ・タリヒ〔Olke tarihi 省史〕〕。

またヘヴェルの著作には、ウルムチに来てからのエイサやアルタイ出版社について、次のように記している。「エイサの応接室には様々な書籍や刊行物が所狭しと置かれ、それらはトルコで編集・印刷したものだった。ウルムチの知識青年たちは誰でもエイサやボグラの応接室に行って彼らと話をしたり、そこにあった沢山の書物を閲覧できた。（略）当時は『新疆日報』と『三民主義』以外にこれといって読むような書籍がなかったから、一部の知識青年はあつという間に3紳士の影響を強く受けることとなった」「1946年夏、ボグラやエイサらがアルタイ出版社の創設を提議した時、多くの知識青年が次々に支持を表明した」。

東トルキスタン共和国政府の要人かつ新疆省連合政府内務省副長官で、マスードの甥でした。

エイサは和平協定の署名後、1946年後半に蘭州(甘粛省省都)から印刷所を移してきて、「アルタイ〔阿爾泰〕出版社」を作った。彼はそれまでに『中国のトルキスタンの声〔チニ・トルキスタン・アワズィ Chini Turkistan Awazi〕』や『軍事情報〔ウルシュ・ハヴァルリリ Urush Heverliri〕』などといった刊行物を創刊していた。今度はさらに論説誌『アルタイ〔Altay〕』が加わった。そこで彼は、自らの政治的主張や望ましい将来的展望をおおいに鼓吹した。

エイサによってアルタイ出版社からは、更に『炎〔ヤルクン Yalqun〕』『自由〔エルク Erk〕』などの新聞が発刊された。前者の編集長はクルバン・クダイ、後者はイブラヒム・ムティイ。彼らはその中で、ウイグル語・カザフ語版の『新疆日報』に対する批判宣伝を展開した。これらの新聞はイリ側～東トルキスタン共和国陣営～を、“赤足”“ソヴィエトの手先”といった皮肉な呼びかけで、しきりに誹謗した。(自伝89頁)

ウイグル語・カザフ語版『新疆日報』側は、彼らを“親中人士”、“中国の手先”、“中国系トルキスタン人”、“パン・テュルク主義者”、“使い走りの3紳士”などと呼んでいた。“紳士〔エペンディ〕”というのは、この言葉のもう1つの意味～愚か者～の意で用いたのだった。東トルキスタン共和国に対する攻撃においては、『炎〔ヤルクン〕』の編集長、クルバン・クダイのそれが群を抜いていた。(自伝90頁)

国民政府官僚のウイグル人たちは、当時のソヴィエト共産党が領域内のテュルク系民族にどういう態度であったのか熟知しており、共産主義体制をととても嫌っていました。特にエイサは、1930年前後の頃に現ウズベキスタンの中国領事館で働いていましたから。翻って私たち編集部などは、「我々は東トルキスタン独立を主張する三区側を代表するメディア。彼らは中華民国中央政府の代表なのだ」という意識が強く、彼らを「反ソ・親中派」と呼び、彼らは私たちを「親ソ派」と呼び、その政治的に置かれた立場の違いから反目し合っていました。しかし、ムハンマドイミン・ボグラについては、三区側も一目置くところがありました。

私は当時、何人もの三区関係者から、「アフメドジャン・カスムと新疆省連合政府・内務省副長官のラヒムジャン・サビルハジエフは、幾度もムハンマドイミン・ボグラとマスード・サブりに、グルジャを訪問するよう説得していた」と聞いていました。あの頃、たまたまウルクチに来ていた東トルキスタン共和国軍事委員会委員・同国騎兵部隊司令官の東干〔ドゥンガン〕人ケリム・ハジ(1885-1955)も、「アフメドジャン・カスムが、ムハンマドイミン・ボグラの妻アミナハンに何度か会って、グルジャ訪問を要請した」と語っていました。アフメドジャンは、どうしてもムハンマドイミンをグルジャへ連れ出したかったのです。しかし、「ムハンマドイミン・ボグラ獲得計画」は、悉く失敗に終わりました。

**【解説5】中国国民政府のウイグル人官僚への「評価」について**

国民政府高級官僚だったエイサ・アルプテキンは、中華民国政府崩壊後、国民党主要幹部とともに台湾に逃亡はせず、インド・カシミールを経てトルコに政治亡命した。トルコに落ち着いてから死去するまでの後半生、彼は在外ウイグル人のネットワーク作りに奔走し、ウイグル人の置かれている状況を欧米社会に宣伝するスポークスマンとして、或いは民族運動のリーダーとして活躍した<sup>(注9)</sup>。エイサの生涯を振り返るならば、ここでムニールによって語られている東トルキスタン共和国側メディアによる「彼らは中国寄りの人間である」との批判は妥当ではないと、筆者は考える。また、新疆の知識人の中に、エイサらを支持する声があったことはヘヴェル・トゥムルの証言然りである。しかし、いずれにせよムニールら当時の三区側の人々が、エイサらを「国民政府（≒漢人）側の者たち」と見なし、好意を持っていなかったのは事実であろう。

なお1940年代にエイサらが新疆問題について、出版刊行物でどのような主張を展開していたかについては、さらなる研究が待たれるところである。

**●新疆省連合政府の崩壊と編集部解散**

1947年5月張治中は新疆省連合政府代表を辞任し、国民政府は後任にマスード・サブりを任命しました。三区の政治家たちは、三区側に不人気のマスード着任祝賀式典への出席を拒否し、この人事への抗議としました。国民政府と三区側の緊張関係は日に日に悪化し、状況は更に複雑化して、とうとう同年8月12日、新疆省連合政府第一副主席アフメドジャン・カスムが、ウルムチから飛行機でグルジャへ退去するという事態にまで発展しました。

ウイグル語版とカザフ語版『新疆日報』は実質三区の宣伝媒体でしたので、この「アフメドジャン撤退事件」によって、ウルムチで大変難しい立場に置かれるようになりました。私たちは漢語版『新疆日報』から烈しい攻撃にさらされ、漢語版は毎号私たちに罵声を投げつける有様で、その内容は日を追うごとにエスカレートしていきました<sup>(注10)</sup>。国民政府側の軍や警察の締め付けも厳しくなり、編集部員たちは身の危険を感じるようになりました。8月末になると、

(注9) 新免康「ウイグル人民族主義者エイサ・ユスブ・アルプテキンの軌跡」（『中華世界 — アイデンティティの再編』毛里和子編 2001年 東京大学出版会）

(注10) 『新疆日報』漢語版のウイグル語版に対する「激しい攻撃」について、前述の李帆群著「国民党統治時期的《新疆日報》」にも詳細が語られている。それによると、漢語版では「絶えず社論を利用し（略）三区の言論に反対を表明」し、「読者便りのコーナーでは反三区の気分を演出」。「時に（漢人記者が）ウイグル人の筆名を使い、ウイグル人のように装って原稿を記し、ウイグル人の団結を妨害した」という。さらに、実際に李自身も「トゥルスン〔吐爾遜〕の仮名で、少数民族が三区に反対することを激励するような文章を記した」と文中で証言している。

ウルムチの軍事法廷がサイラニ編集長、及び主な編集部員の拘留を命じ、「反政府的態度を変えないと、軍事法廷で罪を問う」と通知してきました。これを知った私たち編集部メンバーは、グルジャへ密かに退去することを決定しました。

私がウルムチを脱出したのは1947年8月26日。手引きする人を通じて、飛行機をしたてての逃避行でした。編集部的主要メンバーは、新疆省連合政府内務省副長官のラヒムジャン・サビルハジエフとともに同日、私より早い便でウルムチを脱出し、グルジャへ着いていました。この日、和平協定は実質的に破棄され、1年程続いた新疆省連合政府は崩壊しました。

### ●官報『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』紙<sup>(注11)</sup>での記者生活

グルジャへと逃れた私は、あてがわれた宿舎で数日間休養してから、三区側官報『インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズイティ』〔Inkhillabi Sharqi Turkistan Gaziti〕紙編集部へ転職しました。『インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズイティ』は、『革命的東トルキスタン紙』または『東トルキスタン革命報』とも訳されます。ウイグル・サイラニは、1947年8月27日付で同紙4代目の編集長に任命されていました。

臨時で第3代目編集長を務めていたアスハト・イスハコフ(1921-1976)は、8月27日付でイリ地区行政署の署長に任ぜられ、転任して行きました。アスハトはカザン出身のタタール人で、モスクワで教育を受けた人物でした。

私は1947年9月から、この新聞のウイグル語編集部責任者のヌルムハマット・ボサコフの下

#### 東トルキスタン革命報



(注11) ムニールが保存していた『インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズイティ』〔東トルキスタン革命報〕(写真)

で、漢語～ウイグル語の通訳翻訳者として働くことになりました。同僚には、グルジャ出身のウイグル人アルカム・アフタム、やはりウイグル人でウイグル語版編集者のメメット・ステディック・ノルズ〔ロシア語名ノロゾフ〕、編集部顧問のサビット・ダモツラ、ウイグル語～漢語翻訳者のアブドゥレシット・イミン、タタール人のハミット・トゥフフィといった人々がいました。彼らは私が働き始めた当初から、職場に快く受け入れてくれた上に温かく接してくれました。それは私がまだ20歳そこそこの若造で、職場で最年少だったせいもあるのでしょうか。

そういえば、こんなこともありました。編集部顧問で宗教関係記事の担当であったサビット・ダモツラは、新しく編集部に来てきた私に「これまで何をし、何を学んできたのか？」と事細かく問うたので、私は自分の経歴を全て話しました。

「創刊号が出てからこのかた、ここの人間には編集部でも礼拝を行え、断食もすべきだと主張しているのだが、君は賛成か？」

「もちろんです。私も一緒にお祈りするし断食もやります。いい事じゃないですか？」と私が答えると、彼は「バレケアツラ！〔barik alla アッラーの祝福あれ〕」と一声叫んで私の肩を叩いた。（自伝98頁）

そうして私はサビットとも親しくなり、アラビア語とペルシャ語の造詣が深いサビットから、それらの言語の正字法や正しい言葉遣いを教えてもらいました。

私が編集部で仕事をする間に、面識を得たイリの著名人には、次のような人々がいました。ウイグル人劇作家のズヌン・カーディリヤ、ウイグル人の詩人ティプジャン・イリエフ、ケベル・ニヤズ。私はニーム・シェヒト・アルミヤ・ダモツラの叙事詩『パルハット・シリン〔Parhat Shirin〕』の原稿校正を担当したことがありました。この詩集は最初に私たちの新聞に掲載されたのです。

同紙のカザフ語版『革命の曙〔トンケリス・タニ Tongkers Tangi〕』の編集部で働いていた副編集長クルマナリ・オスパノフ、記者クルマンバイ・トルバイエフや、漢語～カザフ語翻訳者アブドゥベク・バイボラトフとも親しくなりました。

グルジャの街では、ウルムチと違って簡単にソ連の書籍が手に入りました。「グルジャ・ソ連市民協会」が運営していた書店があって、そこではカザフスタンのアルマ・アタにあるカザク・イェリ〔カザフ語で「カザフの国」の意 Kazak Eli〕雑誌社や、ジャナ・エミル〔カザフ語で「新生活」の意 Janga omil〕出版社から発行されていた様々なウイグル語やカザフ語の雑誌や書籍が買えました。例えば雑誌『イェンギ・ハヤト〔ウイグル語で「新生活」の意 Yengi Hayat〕』や『カザク・イェリ（この雑誌はのちにジャナ・エミルと名称変更）』。また、ウズベキスタンの刊行物『シャルク・ハキカティ〔東方真理 Sharq Haqiqeti〕』誌なども、手に入りました。

## ●東トルキスタン共和国(三区)「政府公報(官報)」史

さて、東トルキスタン共和国の政府公報の歴史を、ここで話しておきましょう。

1944年11月12日の東トルキスタン共和国樹立大会の際に政府機関紙を発刊することが取り決められ、11月17日『アザット・シャルキ・トルキスタン [Azat Sharqi Turkistan]』紙出版局が設置されました。アザット・シャルキ・トルキスタンとは「自由な東トルキスタン」の意で、「解放された東トルキスタン」と訳されることもあります。出版局の責任者兼初代編集長には、東トルキスタン共和国政府・教育省長官で、留ソ経験のあるタタール人のハビブ・ファズイルジャン・ウリ・ユンチ(1906-1945)が着任。同紙はグルジャに於いてウイグル語・カザフ語・モンゴル語・ロシア語・漢語の5言語の編集部門が設けられ、政治状況によって変わることもありましたが、だいたい週3回の割で発行されるようになりました。漢語版も『自由の東土耳其斯坦報』の名で発行されました。新聞社にはウイグル語編集部に7人程いて、社長、編集長を合算しても人員は多くありませんでした。漢語、ウイグル語、カザフ語の印刷部門は、同じ工場を使っていたと覚えています。

『アザット・シャルキ・トルキスタン』創刊号発行日については諸説あり、共和国樹立大会より約1週間前の11月5日にグルジャの街で、国民政府を攻撃する内容のパンフレットが撒かれ、そのパンフを根拠に「この日に刊行された」と主張する人もいます。

初代編集長ハビブ・ユンチがチフスに罹って若くして亡くなった後、1945年3月15日から2代目編集長となったのは、グルジャのウイグル人フサイン・ナスイロフでした。余談ですが彼は、2000年カザフスタンのチリク地区で亡くなっています。

「11か条の和平協定」締結後、1946年6月27日付の「東トルキスタン共和国政府委員会決議第324号」によって、『アザット・シャルキ・トルキスタン』紙出版局は、同月28日からイリ地区行政当局下の1部門に改編され、ウイグル語版が『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』、カザフ語版は『革命の曙 [トンケリス・タニ]』、漢語版は『民主報』、モンゴル語版は『人民報』、ロシア語版は『人民通報 [ビスニクナロード]』と名称変更されました。

東トルキスタン共和国が解消し、新疆省連合政府が発足した1946年7月1日を過ぎても、グルジャの人々は相変わらず三区を「東トルキスタン共和国」と見なし、三区政府を「東トルキスタン共和国政府」と呼び続けました。三区は、1949年10月に中国共産党の統治下となるまで、中華民国の一部ではない政治的・経済的に独立した存在であり続けました。三区の官報も、『インキラビ・シャルキ・トルキスタン・ガズィティ』の名で出版され続けたのです。

## ●同僚ハミット・トゥフフィのこと

ジャーナリストで詩人でもある同僚のハミット・トゥフフィとは、初対面で意気投合しました。

トゥフフィは私に近づいてくると、「よう、君！昼休み、一緒にメシを食おうじゃないか」と、なまりがまったくないタタール語で言った。私は同意のしるしに頷き、椅子から立ち上がると、彼の後を追った。（自伝99頁）

ハミット・トゥフフィは編集部のなかで、ウイグル人・カザフ人の別なく、大変な権威と尊敬とを得ており、ウイグル人たちは、彼らの流儀にしたがって「テフパ」～彼らの言葉で宝物・授かり物～と呼んでいた。（自伝104頁）

フルネームはハミット・ザキル・ウリイ・トゥフフィ。ロシア語風にトゥフフィをトゥフファトゥリンと言うこともあります。1922年11月15日セミパラチンスク生まれのタタール人で、先祖は現タタールスタンのカザン、カマ川河畔にあるチスタボル地区の出だそうです。一家は1931年に中央アジアのフルンゼ、現在のキルギス共和国首都ビシュケクに移住。さらに1933年中国新疆イリ地区グルジャに再移住したとのこと。グルジャのタタール人学校を卒業すると独学で多言語をマスターし、プーシキンやレールモントフの詩をロシア語で、サーディの『薔薇園』をペルシャ語で朗々と吟じていました。彼の詩の朗読はひとの胸を打つ美しさで、今でもその音が私の耳の底に残って離れません。実に彼は「多芸な男」でした。ウイグル語やカザフ語を訛りなく操り、彼がウイグル語で書いた論説は、常に新聞や雑誌の紙面を飾っていました。また、彼が民族の伝説的英雄ゲニ・バトゥル・マメットバキ・ウリイについて唱った詩は、『アザット・シャルキ・トルキスタン』紙の創刊号に掲載され、人気を博しました。

ハミット・トゥフフィは熱烈なタタール民族主義者で活動家でもありましたが、同じテュルク系の同胞諸民族に対しては真摯な兄弟的連帯意識を持っていましたから、彼が係わった運動は偏狭な愛国主義とは無縁でした。例えばタタール人詩人ガブドゥラ・トゥカイ60歳記念の詩集を、トゥフフィ自身が序文を書いて1947年、『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』社から700部刷って出版しました。このように彼が係わったタタール民族運動はいずれも、民族の歴史文化を啓蒙することで民族的自覚を促すという、高尚で平和的なものだったのです。

トゥフフィは、グルジャのタタール人が抱える社会問題に注意を怠らなかつた。彼はしばしば、タタール人協会の収入をいかに使用するかで問題を提起し、「貧しい大多数の人々のために支出すべきだ」と訴えた。彼の言動が保守的な向きからは歓迎されなかつたのは

有名な事実である。（自伝102頁）

彼はグルジャに來たばかりで、ここのタタール人コミュニティと縁がなかった私に、三区のタタール人を大勢紹介してくれました。東トルキスタン共和国では、政治・軍事・教育などの要職に、少なからぬタタール人が就任していました<sup>(注12)</sup>。この件については、私と同世代のグルジャ出身タタール人学者ミルカシム・アブドラハトヴィチ・ウスマノフが、タタール語の労作『開けられたままの本〔османов Миркасыйм. Ябылмаган китап. - Казан: Татарстан китап нәшр 1996〕』の中で詳細に記しています。20世紀前半のグルジャでは、文化・教育・経済いずれの分野に於いてもタタール人が大きな足跡を残し、社会の進歩に貢献していたのです。

トゥフフィの御母堂には、しばしば伝統的で正統なタタール料理を振る舞ってもらい、まるで家族の様に遇してもらいました。こうして私は大いに感化され、「自分はタタール人なのだ」というアイデンティティを再認識するようになりました。ある日、「タタール人として、このままではいけない」と思った私は、一からタタール語を勉強し直そうとグルジャのタタール人学校の門を叩き、タタール語とタタール文学の教科書を求めました。教師たちは「その年齢で学ぼうなんて、もう遅いんじゃないの？」と茶化しながらも教科書を快く分けてくれ、それからは「母語」の自学自習に勤しんだものです。

#### 【解説6】グルジャのタタール人学校

20世紀初頭までのグルジャでは、学校と言えば男児を対象にクルアーンを教える宗教学校が主体であったが、この頃から「科学的知識に基づいた教育を子供たちに施そう」という普通科教育（当時で言う新式教育）運動が、盛んにタタール人教育者によって提唱されるようになった。1910年代初頭にグルジャの男子中学「カシュフェル〔曙光〕学校」が新式教育を採用。さらに1914年には女兒を対象とした新式教育校「グルジャ光明学校」が開校した。両校はいずれも宗教者かつ啓蒙活動家であったタタール人のカシュフェルアスラル・ハズラット・ヴァハブと、教育者ガブドル・ワハブの尽力によるものだった<sup>(注13)</sup>。

のちにグルジャのタタール人学校は統合し、男女もそして民族も問わず生徒を受け入れるようになり、進歩的教育を施す学校として新疆で広く知られるようになった。グルジャ・タタール人学校は卒業生に多くの著名人を輩出し、例えば三区ニルカ出身のウイグル人詩人、ルート

(注12) ムニールは前掲の自伝の中で、東トルキスタン共和国の役職を得た代表的なタタール人の事例として、ファティフ・アラヤリ〔ロシア語でアルガダロフ〕やタヴァイハヌム・ミルシャノフ、マルグブ・イスハコフ、アイトゥガン・ユニチ、マリク・ギマジエフなどの名を挙げている。

(注13) 『中国塔塔爾族教育史』（馬力克・恰尼希夫〔マリク・チャニシェフ〕著 民族出版社 2005年 84-85頁等）

フツラ・ムタリプ（1922-1945）も同校で学んだ生徒だった。ルットフツラはアクスで地下組織「ウシュケン〔火花〕」を結成し、三区外でその革命への支援活動をしていたが、中華民国当局に逮捕され殺害されている。

## ●トウフフィが語ったアフメドジャン・カスム

同僚のハミット・トウフフィは、東トルキスタン共和国建国初期の『アザット・シャルキ・トルキスタン』紙発刊のときから働いていて、編集部ではアフメドジャン・カスムと机を並べていた同僚でした。彼はアフメドジャンと仲がよく、「1947年8月末、2人でボロタラ〔博楽〕にあるアラサン温泉で一緒に休暇を過ごし、そこで長い間話込んだ」と、私に話してくれました。アフメドジャン・カスムは彼に、1930年代末にカザンの学校で学び、多くのタタール人と親しくなったこと、その学校にはスルタン・ガリエフ主義者が書いたパンフレットがあったことなどを語ったといいます。

アフメドジャン・カスムは1914年、グルジャ生まれ。幼い頃に母方叔父とソ連カザフスタンに移住し、モスクワの東方勤労者共産大学で学び、1942年6月新疆に戻って、イリ地区及びタルバガタイ地区で地下活動に従事しました。それが元で1943年10月に逮捕投獄され<sup>(注14)</sup>、1944年10月釈放されると再び革命の道を進みました。2人はグルジャの街が蜂起軍の手中に落ちた頃には『アザット・シャルキ・トルキスタン』編集部で働いていて、アフメドジャンはそれから間もなく、東トルキスタン共和国の秘書局に入ったと聞いています。

1945年の3月末、東トルキスタン共和国政府はズヌン・タイポフ軍事庁長官を免職し、アフメドジャン・カスムを軍事庁の責任者に任命。それから約2週間後の4月15日にアフメドジャンは陸軍中佐となり、中華民国中央政府と「和平条約」交渉に入る4日前の同年10月10日には「東トルキスタン共和国政府委員会決議第103号」によって政府委員に昇格し、交渉における政府代表団公式序列では、ラヒムジャン・サビルハジエフ、イリハン・トレに続く第3番目の地位にいました。急激な昇級を果たしたわけです。「アフメドジャンの博識さと雄弁さは、中華民国側代表団のトップであった張治中將軍を驚嘆させた」と噂になり、10月22日東トルキスタン共和国政府はアフメドジャンをさらに陸軍大佐に昇格させ、軍事委員会メンバーとしました。

(注14) 「三区革命的卓越領導人 阿合買提江・卡斯米烈士伝」(『新疆烈士伝 第4輯』(新疆維吾爾自治區民政庁編 新疆人民出版社 1989年)によると、逮捕投獄されたのは1943年12月、釈放は1944年12月となっている。

## ●情報調査局「情報管理連合」での仕事

グルジャでは1948年8月、アフメドジャン・カスムの指導下で三区代表者会議が開かれ、「新疆の平和と民主を守る同盟〔漢語で新疆保衛和平民主同盟〕」の結成が採択され、アフメドジャン・カスムが同組織の中央委員会主席に選ばれました。

同年9月26日中央執行委員会の会議で、「新疆の平和と民主を守る同盟」中央委員会に付随して「情報管理連合」も組織されることが決定し、9月28日アブドゥケリム・アバソフがこの団体の代表者に任命されました。情報管理連合とは、無線技師・通訳翻訳者・特派員・編集員から構成された、一種の情報調査局のようなものです。私はこれまでの新聞社の仕事に加えて「情報管理連合」での翻訳業務が増え、多忙となりました。カザフ通信社やウズベキスタン通信社のラジオ放送や、中国共産党が運営する新華社通信のニュースを、ウイグル語やカザフ語に翻訳し、翻訳記事を三区の新聞に掲載するのです。

作業のため私には個室とラジオなどの機材が与えられました。中国共産党が1938年に延安で設立した新華社の流すニュースは、漢語紙『民主報』の編集部員である李泰玉が私の所に運んできました。当初私は、李がもたらす新華社ニュースの入手経路について、皆目見当もつきませんでした。大分あとになって彭長貴という漢人が1947年7月から無線を受信し、情報速記を『民主報』編集部の李に渡していると知りました。

彭長貴は、アブドゥケリム・アバソフが南京から三区に連れて来た人物でした。1946年11月、中華民国政府が南京で国民大会を開催したとき、三区はアブドゥケリム・アバソフらを代表団として派遣し、その帰途の1947年1月、現地で知り合った彭や無線技士たちをグルジャに連れ帰ったのです。彭は周囲には「アブドゥケリム・アバソフの中国人妻である呂素新の親戚」と名乗っていましたが、それが本当か否かは分かりません。私が知っていたのは、彭がどこかの組織の密偵であったこと、三区へは「彭国安」の変名で送り込まれ、三区到着後に更に「王安迪」と名を変えたことでした。

### 【解説7】中国共産党の密偵・彭長貴と三区

1944年頃、東トルキスタン共和国の政治リーダーたちの人間関係は大層複雑で、その政治主張や宗教思想などを別にする複数のグループが存在していた。新疆史研究者王柯が指摘する通りこの時代、三区のテュルク系ムスリム住民の多くが「ソ連の支援を中国支配排除のための手段として共通して求めた」<sup>(注15)</sup>ために、グルジャの政治の主流は「知ソ派(ソ連をよく知る者たち)」であった。

(注15) 『東トルキスタン共和国研究』(王柯著 東京大学出版会 1995年 114頁)

しかし、1945年、ヤルタ会議を経てソ連が中華民国国民政府との間に「中ソ友好同盟条約」を締結すると、ソ連に深い猜疑心を抱く三区の政治リーダーも増加し、こうした一部政治リーダーたちは同年末頃、アバソフを中心に「人民革命党」を結成し、のちに彼らは中国共産党との連携を求めるようになる。組織の中央委員会メンバーは7人で、アバソフが「ルトフィ」、サイフディン・エズィズィ（1915-2004 アトシユ出身のウイグル人、ソ連タシケントに留学）が「ヌール」、タタール人のアスハト・イスハコフが「イジャット」などと偽名で呼び合い、地下活動をしていたという。

1946年11月、中華民国政府の国民大会が南京で開催され、総勢18名の新疆代表団がウルムチから飛行機で派遣された。代表団にはエイサら中国国民党側のみならず、アフメドジャン・カスム、アバソフら計7名の三区側代表者もいた。

アバソフはこの機会を利用して、南京に於ける中国共産党代表団の所在地梅園新村を数回訪れ、その代表者であった董必武と会見し、「中国共産党による三区革命の直接指導、三区政治家が中国共産党へ加入することの承認、政治・経済・軍事専門要員を三区へ派遣することの要請、中共党中央と三区との連絡関係の確立、などを提起した」とされる<sup>(注16)</sup>。董必武は「阿同志〔アバソフ〕」への対応について延安に指導を仰ぎ、この件を重視した党中央は、周恩来に起草させて劉少奇がサインをした電文を返している。これを以て「三区のアバソフグループ～中共中央」ラインが確立し、中国共産党はこの時、彭長貴を連絡員に任じ、アバソフとともに三区に赴かせた。彭は、延安で刊行された中国共産党諸文献とともに無線機材を三区に持ち込んだ。なおサイフディンが書いたアバソフ伝『天山雄鷹』に依ると、彭と呂素新との間に親族関係はないという。

## ●アルタイ地区特派員としての赴任

私が「情報管理協会」で仕事を始めて2週間も経たない1948年10月15日、突然「『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』の特派員記者として、アルタイ地区に出向せよ」との内辞を受けました。1943年の学校休暇時に1度だけアルタイに里帰りしましたが、それ以来故郷に戻る機会はなく家族の様子はずっと気にかかっていたから、これは私にとって嬉しい人事でした。

内辞を受けた日、アブドゥケリム・アバソフに連れられて「新疆の平和と民主を守る同盟」

(注16) 『天山雄鷹－阿布杜克力木・阿巴索夫〔アブドゥケリム・アバソフ〕生平』（賽福鼎〔サイフディン・エズィズィ〕著 中国文史出版社 1987年）、『賽福鼎〔サイフディン・エズィズィ〕回憶録』（賽福鼎著 華夏出版社 1993年 330-337頁）、『為了新疆解放』（中共新疆維吾爾自治區委員會黨史研究室編 新疆人民出版社 2006年 93-99頁等 97頁に彭長貴の写像がある）

中央委員会の事務所が入っている建物へ行き、そこでアフメドジャン・カスムに引き合わされました。

丁重に私を一瞥したアフメドジャンは、目下の人間にも「貴方」と話しかけるような、ウイグル人独特の礼儀正しい雰囲気や漂わせつつ、私に語りかけた。「若い貴方を遠方へ送ることについて、どうかという声もあったのですが、ここはやはり貴方に『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』の特派員として、アルタイ地区へ行ってもらいたいと思います。『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』は、グルジャには記者がいます。しかしタルバガタイとアルタイにはいない。貴方は、イリ地区の境をこえる同紙最初の記者となるのです。アルタイ地区はいま、イリやタルバガタイよりも複雑で困難な状況にあります。三区政府に反対する勢力の手にアルタイ地区が落ちたのはたった1年前のことでした。アルタイ地区はそのまま2ヶ月間、彼らの手に握られたままでした。人民はアルタイ地区で何が起きているのか、まったく分かりません。情報が無いからです。貴方の第一の任務は、貴方が籍を置く新聞社と貴方が働いている情報管理部門『連合』に対して、アルタイ地区における政治的情勢、社会・経済的な状況、そしてその地における住民の現地行政機関および三区政府との関係に関する情報をもたらすことです。貴方ならこの任をきっと果たせるだろうと、私は考えています。まず第一に、貴方はカザフ語に堪能でカザフ人の習慣をよくご存じだそうですね。第二に、アルタイのご出身だ。現地に数多くのご親戚やお知り合いがいらっしゃる。これら絶好の条件が任務の成功に大いに寄与するでしょう」(自伝109頁)

私がアルタイ行きに同意すると、翌日、正式な辞令が発行されました。

10月18日、道中の治安を心配したアフメドジャン・カスムの助言により、私は空路でグルジャを離れました。飛行機はソ連と中国の合作航空会社のチャーター機で、パイロットはロシア人でした。この頃、私はロシア語がさっぱり分からず、パイロットと身振り手振りで意思疎通をしたところ、同乗者はソ連の軍将校3人で、機内には武器弾薬が満載されていると知りました。

飛行機がアルタイ地区の故郷ブルチンに着陸すると、私は兎にも角にもまっすぐ我が家へ向かいました。私の進路に大きな影響を与え、父親代わりだった祖父ハリルに、一刻も早く会いたかったのです。家に着くと家族は、私の突然の帰郷に驚きながらも大層喜び、あれよあれよという間に歓迎の宴が始まり、帰郷を知った親戚や友人が絶え間なくやって来て、たくさんの料理が作られ、胡座の円で積もる話に花が咲きました。その場に見あたらぬハリルのことを家人に尋ねると、「病を得て1944年に71歳で亡くなった」と告げられ、帰郷の喜びから一転、深い悲しみに襲われました。

**【解説8】三区のソ連人たち**

ムニールは次のように三区のソ連国籍者について、自伝に記している。

1946年6月の半ば、母国からの命令で、東トルキスタン共和国のソ連顧問たちは帰国していった。彼らはかの有名な“第一室”、“第二室”である。彼らの後を追って、東トルキスタン共和国の諸官庁や部署にいたイヴァン・ゲオルギエヴィチ・ポリノフ民族軍司令官や、タルバガタイ地区勤務のアドバイザーでソ連籍ウイグル人のマンスル・ルジエフ〔マンスル・ロズヨフともいう〕といった顧問たちも去っていった。彼らより以前、1945年12月にはソ連軍事顧問のカザフ人アルィプバイ〔アジプバイとも〕が帰国していた。彼は1945年9月にはアルタイ地区で副知事を勤めていた。（自伝97頁）

1946年11月1日、グルジャではイリ地区ソ連市民協会が結成され、サディク・ムスリモフが代表として選ばれた。結成大会にはグルジャのソ連領事館からドバシンという名の領事も出席して、こんなスピーチをした。「ソヴィエト政府は、1945年11月10日に発表した宣言に従い、過去に諸般の理由によって祖国を離れたソ連市民の帰国を支持し支援します」。そうして11月のうちに、タリバガタイとアルタイにもソ連市民協会が設立され、それから三区ではソ連市民権獲得キャンペーンが始まった。（自伝97頁）

ムニールはさらに筆者へのインタビューで、「東トルキスタン共和国建国初期には各所にいたソ連人が、1945年第二次世界大戦終結後に続々と帰国し、私がグルジャに行った時にはもうソ連人政府顧問は居なかった。しかし、ソ連籍の軍人は三区にまだ駐留しており、民間機関にもソ連籍の者が働いていた」と証言している。

**●アルタイ特派員としての仕事**

組織から命ぜられていた仕事を遂行するため、私は与えられた経費の中から馬と鞍を購入し、ブルチンのような都市とその近郊を訪問し始めました。行政機関や諸団体を訪れて資料収集し、さらに村落や放牧地まで足を伸ばし、住民の生活環境や政治経済状態を実地調査するのです。

まず面会したのはブルチン県長リシャト・アビルマジンです。彼は1947年10月18日、ダレルハン・スグルバエフ將軍率いる軍隊がオスマン・イスラムの部隊をアルタイ地区から一掃した際に、ブルチン県の県長に任ぜられた人物でした。リシャットの父は清国時代には「グン〔公〕』という特権身分を持ち、一族は「チャガタイの息子バイダルの子孫にあたる」と言われる地元の名家でした。彼らは私の父方祖父ハリルとも、私の母方祖父サグドゥラ・ハジ・ビクチャンタエフとも親交があって、この地に関する調査では様々な便宜を図ってくれました。

次に私は、サラスメ〔サラスメはモンゴル語で、現アルタイ〕を訪問しました。この地での調査は結果として大いに収穫はあったものの、苦戦の連続でした。

ブルチンに来ていた祖父ハ ril の又従兄弟ハサン・イェルズィンを道案内に雇って、雪降る季節にブルチンからサラスメに向かい、同日夕刻に現地到着。夜は伯父の家に泊って、翌朝にハサンが勤務するサラスメのアルタイ地区行政局を訪ねました。行政局で応対に出た秘書局のナザルベクという人物は、「この地区の支配者であるダレルハン・スグルバエフ將軍についてお会いしたい」という私の要望に、「將軍はお忙しいのだ」の一点張りで、相手にしてもらえませんでした。仕方なく「では『新疆における平和と民主主義を守る連合』設立委員会代表であったシェムシ・マミエフに会いたいのですが」と話題を変えると、「確かにシェムシのオフィスは同ビル内にあるが、今、彼は不在だ」と、やはりとりつく島もない言葉を返してきました。アフメドジャン・カスムからシェムシ・マミエフ宛に渡すべき書類を言付かっていましたから、それを渡す必要があったのです。「ああ駄目だ。この人のルートでは何も調査は進まない」と見切りをつけ、早々に行政局を辞去しました。

次に私は、行政局の近くにあった地区機関紙『エリクティ・アルタイ〔カザフ語で「自由アルタイ」 **Erikti Altay**〕』編集部へと急ぎました。同紙編集長ムカシェ・ジセクにも、アフメドジャン・カスムから渡すべき書類を言付かっていました。この人物にはすぐに会えて、多くの話を聴けました。

『エリクティ・アルタイ』は、1945年9月末創刊。1948年の9月13日をもって「連合」アルタイ地区常任委員会所属となっていた。『エリクティ・アルタイ』社は新聞のほか、『ビルリク〔カザフ語で「団結一致」の意 **Birlik**〕』という名の政治・社会・経済・文学雑誌も出していた。その他にも、同じ印刷所を使って雑誌『サリハ=サメン〔カザフ語で男女の固有名詞 **Saliha Samen**〕』も出版していた。(自伝116頁)

『エリクティ・アルタイ』社内にある3つの編集部には、オマルガリ・クドゥシェフとかいう名のソ連から来た顧問が働いていた。しかし私は1度も彼の姿を見かけたことはない。向こうがそれを望まなかったのだろう。当時のアルタイには、時期をそれぞれ異にしながら、ドスケノフ、アルイプバイ、セムバイ・セムバエヴィチといったソ連人顧問が滞在していた。彼らはみな目立たない格好をして、地元のカザフ族に混じって暮らしていた。(自伝117頁)

翌日には、編集部の計らいで念願だったシェムシ・マミエフにも会えて、やっとアフメドジャン・カスムの書類を渡せました。シャムシは、祖父ハ ril の知り合いで、かつ早世した父イブラギムとも生前に面識があったと、この時初めて知りました。シェムシは「あなたの父、イブラギムの友人だったガブジェルフマン・トクロフが、ダレルハン・スグルバエフ將軍の副

官になっており、アルタイ地区行政副長官も勤めている」と、この人物に引き合わせてくれました。

ガブジェラフマン・トクロフは私に会うと「友人の息子よ！」と大層喜び、私の訪問目的を聞くと、翌日にダレルハン・スグルバエフ将軍に引き合わせてくれました。彼は1890年東カザフスタン州ザイサン地区のショラックブラク生まれで、カザフ人の一部族である「ナイマン部族」出身なのですが、幼くして両親を亡くし、12歳から私の母方祖父サグドゥラ・ハジ・ビクチャンタエフの家で育てられました。彼の弟ジルダハンも私の祖父ハリルが引き取って育てあげましたから、私にとって彼は、家族そのものだったのです。

### ●ダレルハン・スグルバエフ将軍（1906-1949）の思い出

将軍という役職から、勇ましい武人を想像して私はダレルハンに会いに行きましたが、予想に反して、物静かで理知的な紳士でした。将軍はアルタイ生まれのカザフ人で、カザフの一部族「ケレイト部族」のシェルシ氏族出身。一族の長老の1人は、清代に貴族へ与えられた階級「タイジ」の称号を持っていたといえます。1941年ソ連留学し、1944年6月アルタイに戻って盛世才政治への反対運動を展開し、「カザフ民族復興委員会」を組織。さらに同地区のパルチザン部隊を指揮し、東トルキスタン共和国の軍司令官兼政府委員となっていました

将軍は、高位にありながらちっとも偉ぶっておらず、広い視野に支えられた知性を持ち、沈着冷静で論理的で、それなのに心は常に他者に開かれており奥ゆかしく…、私はその人柄にすっかり心酔したものです。

将軍の話は詳細で、多域多分野にわたるものでした。例として将軍が私に語った経済問題について、一部をお話しましょう。「1947年10月19日以降のアルタイ地区では、政治を安定させる努力が官民挙げて行われていました。社会安定のために最も重要なのは、経済に関する諸問

前列右から三人目がダレルハン・スグルバエフ、四人目が『自由アルタイ』紙総編集長ムカシェ・ジセク、後列右から六人目がムニール。



題の解決です。農業や牧畜業の振興や金融改革に取り組みました。1947年10月末、サルスンバでは新疆商業銀行アルタイ地区支店が開行し、責任者にムナバール・アブドゥラハジエフが就任。さらに新設の三区農業銀行アルタイ地区支店の責任者には、マムット・ヤクブバエフが就任し…」と、この調子で將軍は、地区の状況について軍事行政のみならず経済、農業、文化と分野別に、実に多方面にわたって長時間、若輩の私に解説講義をしてくれたのです。

「1947年9月16日の出来事は、我々にとっていい教訓となった」と將軍は言った。「あの日、オスマン・イスラムの部隊は、新疆の国民政府組織および軍による支援のもとに、我々の弱点部分をうまく突いてアルタイ地区を占領した。我が方は地区から撤退せざるをえなかった。ジェミナイで越境し、ソ連領土を経由して、タルバガタイ地区へ入り、タルバガタイで軍備を補充して支援してくれる住民を募集し、帰還にそなえたのだ。1947年10月15日我々は反攻に転じ、31日までにオスマン・イスラムの勢力をアルタイから完全に駆逐した。この作戦においては、ファテエイ・イヴァノビイチ・レスキンおよびハミット・アリエフ両名の民族軍指揮官の奮闘によるところが大である」。

將軍はこうも言った。「三区の相互関係は悪くはない。しかし、アルタイ地区の住民が当初、東トルキスタン共和国の政治に関して十分な情報を与えられていなかったことは否定できない。グルジャで発行される新聞や雑誌は、交通面における種々の混乱のため、ここアルタイ地区まで届くことは稀だ。その結果、我々はこの地における住民間の宣伝活動が不可能になっている。また我々は、当地の苦しむ住民に対して、彼らの生活水準を早急に改善することもできない。これらは敵対勢力にとり、乗ずべき我らの弱点だ。我々は現在、これらの不備をできうるかぎり補完すべく、鋭意努力中である」

「それはつまりアルタイ地区においては、現在では平穏が破られる危険はないということでしょうか？ それとも依然として脅威は存在するのでしょうか？」という私のこの問いには、次のような答えが与えられた。

「危険が全く払拭されたとは断言はできない。国民政府の將軍たちは相変わらずオスマン・イスラムを支援し、その部隊に武器弾薬、そして資金を供給しているからだ」「その他の地区内、および隣接するタルバガタイ地区の国民政府軍の残党や、新疆省連合政府系の部隊も陰で蠢動している。しかし、我が方は大丈夫だ」。(自伝117頁)

1949年初夏頃、私はサラスメでの任務を終えて故郷ブルチンに戻り、今度はカザフ人が多く住む山間農村部など他地域の調査を始めました。この調査でもガブジェルフマン・トクロフに、何かと便宜を図ってもらいました。

## ●グルジャへの帰還と三区政治の終焉

1949年7月末、アルタイ地区調査を終えて、私は陸路自動車でグルジャに戻り、『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』紙の文芸担当に配置転換となりました。同紙のアルタイ特派員は結局私だけで、前にも後にも他の人が派遣されることはありませんでした。

私が戻ってきた頃、新聞社では『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』の他にも、ウイグル語新聞『アルガ〔前進 Algha〕』や雑誌『イッティパク〔同盟 Ittipaq〕』を平行して出版するようになっていました。『アルガ』紙の創刊は1948年8月21日、『イッティパク』誌は同年10月創刊で、2つは兄弟の様な関係です。『イッティパク』は、新聞では字数が多すぎる政治評論や社会経済問題、文芸作品を取り上げていました。ウイグル語版以外にカザフ語版の『オダク〔カザフ語で「同盟」の意 Odak〕』もありました。これらはアフメドジャンの組織、「新疆の平和と民主を守る同盟」傘下の刊行物と言ってよいでしょう。この頃は、三区を「特区」と呼ぶことが多くなり、三区で出版される刊行物の内容は、次第に共産党色が濃くなっていきました。

「新疆の平和と民主を守る同盟」の傘下で発行された新聞『アルガ〔前進〕』、雑誌『イッティパク〔同盟〕』、雑誌『オダク』においては、「東トルキスタン」という言葉は使われず、「新疆」もしくは「新疆省」の語句が使われた。三区で刊行される出版物では、次第に中国人民解放軍の活動やその勝利についての記事が増えていった。中国共産党中央委員会は、三区に鄧力群を代表として送り込んできた。鄧力群は、1949年8月14日、無線技師と3人の部下を引き連れて、モスクワとアルマ・アタ経由でグルジャにやってきた。この時、アフメドジャン・カスムとイスハクベク・ムノフとの会合がもたれた。通訳に当たったのはアブドゥケリム・アバソフだった。鄧力群の赴任後、三区では集会において中国共産党と人民解放軍について語られることが目に見えて多くなった。「地区の人民解放運動は、中国全体の人民解放運動に有機的に連携する場合にのみ勝利できる」という主張が現れ始めた。新聞を毛沢東の「連合政府について」や「人民民主主義独裁について」という記事が飾るようになった。（自伝128頁）

1949年8月23日、アフメドジャン・カスム、イスハクベク・ムノフ、ダレルハン・スグルバエフ、アブドゥケリム・アバソフの東トルキスタン共和国首脳部4人と新疆民主革命党迪化委員会の羅志は、陸路でグルジャからソ連のアルマ・アタに向けて出発し、そこで飛行機に乗り換え、9月開催予定の第1回中国人民政治協商会議に出席するため北平〔現在の北京〕へ飛び立つはずだったと、私はのちに知りました。彼等が去る直前、私はアフメドジャンに会う機

会があり、その時に彼から「アルタイに行く」と聞いたので、それを信じて疑いませんでした。一行の北平行きは機密扱いで、表向きはアルタイ地区訪問とされていたのでしょうか…。「8月27日に、ソ連領域内イルクーツクのバイカル湖付近で飛行機が墜落した」との悲劇の知らせを聞いた時、どうしてそういうことになったのか、私には分からなかったのです。

5人には3人の随行者がいて、彼等も共に死にました。その内の1人が『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』紙編集部で私と机を並べていた同僚のウイグル人、アブドゥレシット・イミン〔ロシア語名はバオジノフ〕です。彼はグルジャで漢語を習った通訳者で、現在キルギス共和国で発行されているウイグル語新聞『イッティパク』紙編集長の父親にあたります。当時27歳でした。

三区側に情報をもたらしたのはグルジャのソ連領事館で、事件から1週間経った9月3日のことでした。サイフディン・エズィズィがアフメドジャン・カスムの後任となり、ニュースは暫定的極秘事項とされ、当初はアスハト・イスハコフ(タタール人)、サイドゥラ・サイフラエフ(ウイグル人)、ナビジャン・ユスポフ(ウズベク人)だけに知らされました。

9月8日、本来北平に赴くはずであった人々の死によって、代わりにサイフディン・エズィズィとアリムジャン・ハキムバエフ(1914-1991 ウズベク人)、新疆戦闘社の涂治(1901-1976

漢人で新疆学院教授)の3代表が、グルジャからソ連の飛行機で北平に向かいました。この時も彼等は表向きには「タルバガタイ地区訪問のためグルジャを離れる」と言い、真の目的地を秘密にしていました。

#### 【解説9】首脳陣の「飛行機事故」後の三区及び新疆

9月3日にグルジャのソ連領事館に赴いて、三区首脳陣の「飛行機事故と全員死亡の知らせ」を最初に聞いたのは、サイフディン・エズィズィだった。サイフディンは中共中央からイリに派遣されていた鄧力群と対応を相談し、三区側ではアスハト・イスハコフ、サイドゥラ・サイフラエフ、ナビジャン・ユスポフの3人にだけ情報を伝え、当面極秘事項とした。しかし、鄧力群はその日のうちに中共中央にこの知らせを打電。同日夕刻、党中央からはアフメドジャン等への哀悼とともに「新しいメンバーを編成して北平の大会に出席するよう」との返電があったという<sup>(注17)</sup>。

9月5日ソ連機で涂治が迪化〔ウルムチ〕からイリに到着し、新疆に於ける国民政府の現状を鄧力群らに報告。9月8日新たに編成された随行員2人と涂治、サイフディンらの北平訪問団は、ソ連機でイリを離れた。

一行は9月11日に満州里へ到着し、13日瀋陽で中共中央代表の高崗や李富春らの歓迎を受け、15日に北京到着。16日周恩来がウランフと共に接見し、18日、中南海で毛沢東や劉少奇、朱徳

(注17) 『新疆三区革命大事記』(新疆三区革命史編纂委員会編 新疆人民出版社 1994年 286頁)

ら中国共産党指導者たちに迎えられた。9月21日には第1回中国人民政治協商会議に出席し、サイフディン・エズィズィは中国人民政治協商会議の議員に選ばれている。

三区でサイフディン等不在中の責任者となったのは、「新疆における平和と民主主義を守る同盟」臨時主席アスハト・イスハコフ、民族軍臨時責任者ファテエイ・イヴァノヴィチ・レスキン、イリ内務処長ナビジャン・ユスポフ等だった。アスハト・イスハコフは9月28日、中国人民解放軍が中国全土で国民政府軍に勝利したことを祝う電報を、毛沢東に送った。彼は中華人民共和国政府が成立した10月1日にも、北京に祝電を送っている<sup>(註17)</sup>。

一方、国民政府は1948年12月31日付の政令で、新疆省政府主席マスード・サブリと政府秘書長エイサ・アルプテキンを免職し、代わりにブルハン・シャヒーディーを省政府委員兼主席、ムハンマドイミン・ボグラを政府委員兼副主席に任命した<sup>(註17)</sup>。のちにブルハンは三区及び中国共産党と、国民政府側との「折衝役」として立ち回るが、エイサとムハンマドイミンは、中国人民解放軍が新疆に到着するより前に国外逃亡し、政治亡命の道を選んだ。マスードはウルムチに留まり、1950年にその地で死亡している。

## ●中国共産党の統治下の三区

10月10日、人民解放軍の最初の部隊が新疆に進駐してきました。20日にはこの部隊の一部が省都ウルムチに到着し、やがて三区に属する民族軍の解体が始まりました。

三区では、東トルキスタン共和国政府の行政機関建物には、1949年10月初旬まで東トルキスタン共和国政府の星と半月の旗が掲げられていたのに、グルジャでは10月中旬頃から、各施設に中国共産党の五星紅旗が掲げられるようになりました。1944年11月に生まれた東トルキスタン共和国が1949年10月を以て完全に消滅したのだと、五星紅旗が私に教えてくれました。

アフメドジャンらが死亡した「飛行機事故」が三区の中央委員会から公式に布告されたのは、首脳陣死亡から2ヶ月以上も経過した11月1日のことでした。

11月中旬、民族軍参謀副長だったムハンマドイミン・イミノフ大佐に率いられた民族軍騎兵連隊が、イリ地区からアクス方面へ移動した。連隊はアクス、カシュガル、ホタンに分散させられた。12月の半ばには、シホで訓練を受けていたマルグブ・イスハク大佐（タタール人）指揮下の民族軍第一歩兵連隊が、ウルムチへ移動させられた。これら一連の移動命令は、民族軍解体の第一歩だった。これと平行して11月の末には、イリ地区において人民解放軍第6軍所属第17師団第50連隊の駐屯準備が始まっていた。（自伝130-131頁）

12月17日、中華人民共和国新疆省人民政府と新疆軍区の成立が宣言されました。中国人民解

放軍副総司令である彭徳懐元帥が同軍区の司令官兼政治委員に、王震が第一副司令官、サイフディン・エズィズィが第三副司令官に、ブルハン・シャヒーデーが新疆省人民政府主席、副主席にはサイフディン・エズィズィが就任しました。

中国共産党が三区側の政治家ではなく、国民政府側であったブルハン・シャヒーデーを新疆省人民政府主席の座に置いたのには、様々な思惑があったのでしょうか。彼は、国民党の時代に新疆省政府主席の座にありながら、エイサ等とは異なり政治亡命の道を選ばず、1949年9月19日付で「新疆省政府は国民政府との関係を絶つ」との電報<sup>(注18)</sup>を毛沢東に送り、中国共産党への平和的行政権引き渡しを主張したテュルク系民族でした。

ブルハンが主席の座にいた期間は短く、1955年9月に新疆ウイグル自治区が成立すると主席の座はサイフディン・エズィズィに代わりました。

サイフディン・エズィズィは、省政府主席のイスを狙っていた<sup>(注19)</sup>。地縁・血縁、あらゆる人的コネを使って彼はこの地位を得ようと画策した。しかし新疆での決定的なもう一步を踏み出すべく準備中の中国共産党中央委員会は、彼の希望をしばらく保留した。それは来るべき困難が予想される時にそなえての深謀であった。サイフディン・エズィズィの野望が実現するのは、しばらくあとのことである。彼は(新疆ウイグル自治区成立後)、新疆ウイグル自治区人民委員会主席兼新疆ウイグル自治区党委員会書記に任命された。(自伝131頁)

## ●階級闘争の嵐が吹いてきた

三区における変化は各所に及び、『インキラビ・シャルキ・トルキスタン』紙は1950年から『イリ・ガズィティ〔イリ日報〕』と名称変更を迫られ、同年5月以降は中国共産党イリ地区委員会機関紙となり、党委員会宣伝部から統括支配を受けるようになりました。編集長にはアルカム・アフタムが就任し、私はこの頃から編集部主任に昇格し、1954、55年には代理総編集長～つまり権限のない総編集長を、出国するまで勤めました。

---

(注18) 国民政府は1949年4月23日に首都南京を放棄し、広東省の省都広州へと政治の中心を移していた

(注19) ムニールの口述や自伝には、サイフディン・エズィズィに対する否定的な見解が散見される。これについてサイフディン側の見解、つまりブルハンへの思いや、この後の口述に登場するトゥフフィ肅正についての記述を探したのだが、サイフディンの自伝『賽福鼎回憶録』(華夏出版社 1993年)の記述は1949年10月までで終わっており、サイフディン自らの手によるこの件についての「弁明」を、残念ながら探し当てることができなかった。

旧グルジャ行政機関の関係者で、共産党組織とは距離を置いていた人々や地元の主立った知識人は、ウルムチで仕事をすることを勧められ、或いは他の地へと転勤させられていった。転勤組の中にハミット・トゥフフィもいて、彼はグルジャに両親と家族を残したままウルムチへ向かった。私は彼を見送り、その無事を祈った。（自伝132頁）

しばらくして、私はトゥフフィからの手紙を受け取りました。「『新疆日報』ウイグル語版の編集部で働くことになった」との内容で、さらに「近々カシュガルへ特派員として赴く予定であり、仕事が楽しみだ」と書いてありました。

1950年秋、南新疆を訪れたハミット・トゥフフィは、現地住民の生活状態や社会・政治的状況の調査を進め、レポートに纏めて特派員報告として本社に送ったようです。それには南新疆に駐留する中国人民解放軍の兵士たちが、地元住民を蔑視したり迫害している実態が詳細に書かれていたと聞きました。

彼はレポートを送ってほどなく、突如ウルムチへ呼び返されました。戻った彼を待ち受けていたのは激しい批判闘争の嵐で、思想的に問題があるとされた彼は、労働改造所へ送られました。そして階級闘争の嵐は私にも及びました。トゥフフィからの手紙を受け取ったことが、彼の「思想的一味である証拠だ」と判断され、批判対象となったのです。

1951年7月に、新疆人民政府副主席兼省共産党委員会代表兼新疆軍区第三副司令のサイフディン・エズィズィがグルジャを訪れた。県長レベル以上の幹部を集めての会議を開催するのが訪問の目的だった。私はその時、『イリ日報』ウイグル語版編集部の責任者で、かつウイグル語・カザフ語・シボ語で出版されている諸新聞を管轄する任にもあった。私も会議に出席した。サイフディン・エズィズィは、省で起きた諸々の事件について論じるなかで、ハミット・トゥフフィのことに触れた。

「私の手中には今、ハミット・トゥフフィの手紙がある。ムニール同志に宛てたものだ。この中でトゥフフィは、かの匪賊オスマンを“たぐいまれなる勇気を持ち主”と形容している。私はこのような扇動者の賞賛を決して許すことは出来ない。トゥフフィをこの場に引き出し、申し開きさせるべきだ」と、どういうわけかだしぬけにまくしたてた。（自伝134-135頁）

サイフディン・エズィズィがハミット・トゥフフィを糾弾した会議に参加した者のほとんどは、トゥフフィと私の人となりをよく知る人々であったから、サイフディンの提案はその場では賛同されませんでした。けれども私は不吉な予感に身震いし、今後に底知れぬ不安を感じるようになりました。

ハミット・トゥフフィは、のちに釈放されてグルジャに帰ってきたけれど、どの組織もあれ

だけ優秀だった彼を雇おうとせず、彼は老いた両親と家族を抱えて困窮しました。私は彼と仲がよかったのに、どうすることもできなかった。ところが彼は、私にさえ愚痴を言うでも援助を請うでもなく、革製品を扱う露店を開いて、商売の僅かな収入で一家を養うようになりました。そして1955年にソ連へ移住する道を選びました。

新天地を求めたソ連でも彼は、知的労働の場を与えられず、タシケントの工場で一介の肉体労働者として定年まで勤め上げ、1994年7月4日に亡くなりました。学究肌・文人肌であった彼を思うと、彼の人生はそれでよかったのかと心が痛みます。一筋の光であったのは、彼はソ連末期からタタールスタンとのつながりを深め、カザンの新聞や雑誌に詩や論文をしばしば発表するようになり、タタールスタンの出版社から詩作集が出版されたことでしょうか。

### ●ソ連への移住～中国共産党政権下の新疆からの脱出

私はその後も『イリ日報』の編集部で働き続けましたが、1950年中頃に人民解放軍から漢人記者が派遣されてくるようになると、次第に圧迫されるような重苦しい空気を感じ始めました。漢人たちは最初、中国共産党との繋がりを隠していたけれど実態は間違いなく、党から派遣されてきた人たちでした。そのうちジャーナリストの経験も自覚もない新人が大量雇用され、以前からの編集部メンバーは、とうとう私とアルカム・アフタムだけになってしまいました。

職場ではそれから間もなく、党の政治学習会が始まり、1951年末には編集部で貪汚・浪費・官僚主義に反対しようという「三反運動」が行われ、翌1952年には「反行賄」「反偷税漏税」「反偷工減料」「反盗騙国家財産」「反盗窃国家経済情報」というスローガンの五反運動が展開されました。私は三反運動にはひっかかりませんが、五反運動で「よく1人で食事をするのはブルジョア的だ」などと、つまらぬことで批判的になりました。しかたがないではないですか。漢人とは食生活が違うのですから。

1952年の終わり近くの何月だったか、私の下宿に旧知のカリ・イスハコフが、たしかトゥルスン・サディックとかいう名の人物と一緒にたずねてきた。聞いてみればウルムチからやってきたという。この人とはそれまで会ったことがなかった。雑談しているうちに、話がやがてハミット・トゥッフイのことに及んだ。「ハミット・トゥッフイは党の政策、新生活、新しい体制に反対した。彼の扇動的な思想を矯正するにはたったひとつの手段しかない。それは、頭からそれを叩き出すことだ。彼と同じような誤った思想や考え方をを持った人間はほかにもいる」と、トゥルスンはまくし立てた。私は、ハミットをまるで弁護の余地皆無の極悪人であるかのようにまくし立てた「招かれざる遠来の客」のあまりの無慈悲さに、身震いした。彼らには己の意見というものが全くない。彼らは、私の意見を全く徴そうともせずに戻っていった。彼らの来訪は、その不吉な言葉とともに私に不安を抱か

せた。（自伝139-140頁）

最近の一連の不快な出来事の発生は、私が「ソ連居留許可書」を持っていたことを思い起こさせました。過去にハサン・イェルズィン伯父が、一族すべてのソ連市民権を申請し、獲得しておいてくれたのです。そのことは1949年、アルタイ地区からグルジャに戻る際に伯父から知らされていきました。私は母親と親族を連れてソ連に脱出することを真剣に考え始め、親友ハミット・トゥフフィに「ソ連移住を考えている」と相談すると、彼は「それがいい。邪魔さえ入らなければ、私もいずれは移住するつもりだ。グルジャのタタール人は、大抵みなソ連に行くつもりだよ」と耳打ちし、賛同してくれました。

1954年にはソ連市民の母国帰還が始まっていました。そこで私は、まず母ファルザナと弟ミトハトをアルタイからグルジャへ移動させ、ソ連領事館で出国に必要な書類を作成させました。

1955年、私は母・弟とともに、ソ連移住を許可されました。しかし、移住には私にとって「厳しい条件」がついていました。身分証明書と必要書類を受け取りにいったソ連領事館で係員から、「ソヴィエト連邦で1940年以降に出版された文献以外は、同国内に持ち込むことを禁ずる」と注意を受けたのです。私は1910年代から20年代にかけて、タタールスタンで出版されたアラビア語書籍などの貴重書を多数蔵書していましたから、それらを信頼できる蔵書家でウイグルの友で詩人のケビル・ニヤズに預けていくことにしました。ケビル・ニヤズは「私が息災でいるかぎり、君からの預かり物はきつと守る。いつか良い時代が来たら、必ずあなたのもとに返しますよ」と、快く引き受けてくれました。

1989年の9月、私はグルジャを訪れる機会を得、ケビル・ニヤズの家を探しました。そして分かったのは、彼がすでに物故していたこと、彼が愛蔵した書籍の数々は全て、文化大革命時に焼き捨てられたということでした。

## ●ソ連での生活～集団農場を経て新聞社勤務へ

1955年5月16日、私と母と弟は、グルジャからソ連のカザフスタンに出国しました。ほかの数家族とともに、ソ連市民協会の所有するトラックの荷台に乗せられて出発したのですが、途中悪路で荷台が揺れ、母は車上で肩を骨折し、道中には医者がおらず、困り果てました。イリ川に着くと舳で船に乗り換え、乗船の際に、荷物をすべてひっくり返すような手荒な対応のソ連入国審査を受けました。母の肩は船医にも「ここでは治療できない」と断られました。船がイリイスクに着岸すると出迎えが待っており、そこからは鉄道の貨物車でカザフスタン・ジャンプ州ルゴヴォエ駅まで連れて行かれ、さらにゼルノソフホース国营農場に自動車で運ばれました。私たちはこの農場で集団生活するのだと聞かされ、翌日から肉体労働が待っていました。

居留許可書を持って移民してきた私たちは、ソ連に来てからソ連公民証を申請し、交付を受けました。農場の労働者はカザフ人・ロシア人・そしてカフカス地域からの移住者で、物質的にも精神的にも荒涼としたソフホースに私はがっかりし、到着早々「老いた母のためにも、ここから早く脱出しなければ」と考えるようになりました。

一緒に移住してきたある人のツテを便って、アルマ・アタから所用で農場を訪れたその人の息子とともに、ひそかに農園から無許可・無券で列車に乗って、アルマ・アタへ行きました。どうしても旧知のウイグル・サイラニに会いたかったからです。この頃サイラニは、アルマ・アタのカザフ教育大学で学んでいました。サイラニは1952年頃から1955年までアルマ・アタで中国領事館の副領事を務め、領事館が閉鎖された後もこの地に残っていたのです。ウイグル・サイラニは私に、ソ連で生まれ育ったウイグル人ジャーナリスト兼作家で、「カザフ作家連盟ウイグル局」の担当者であるカーディル・ハサノフに引き合わせてくれました。

サイラニのとりなしもあって、カーディル・ハサノフは私に、とりあえず数部の漢語版『人民日報』に掲載されたウイグル族の歴史文化関連記事をウイグル語に訳す仕事を依頼してきました。徹夜で原稿を仕上げ、翌朝一番に届けると、カーディルはその速さに驚き、さらに「文体に感嘆したよ」と言ってくれました。私の翻訳がウイグル語の文語体だったからです。新疆ならばいざしらず、ソ連在住のウイグル人の間では1930～40年代以後、文語体ウイグル語の筆記能力水準は著しく低下していました。

数日後カーディル・ハサノフは私を呼び出し、ゼルノソフホース国営農場の農場長のサインが入った「ムニール・イエルズィンがアルマ・アタへ転出することを許可する書」を見せ、「一刻も早く引っ越してきなさい」と言ってくれました。

1955年8月末、こうして私は晴れて自由の身となり、母と弟とをアルマ・アタへ呼び寄せました。私をずっと助けてくれたウイグル・サイラニはソ連にとどまらず、のちに新疆に戻っていき、後に長く新疆社会科学院に勤務しました。

## ●『共産主義の旗』編集部とウイグル語研究室

ソ連領中央アジアに於けるウイグル人の文化的活動の中心地は、第二次世界大戦前まではウズベキスタンのタシュケントで、その地では1930年代から40年代にウイグル語刊行物『東方真理報〔Sharq Haqiqeti〕』が編集出版されていました。しかし、ソ連政府の政策的意向もあり、大戦後、ウイグル人の文化的活動や刊行物出版の中心地は、カザフスタンのアルマ・アタに移ります。ソ連共産党は連邦を形成していないながら、ある程度の人口を擁する民族については、キルギスが東干〔ドゥンガン〕人を、ウズベキスタンが朝鮮人を、カザフがウイグル人を担当し、世話をするよう取り計らいました。当時ウズベクとカザフでは、居住するウイグル人の数はさして変わらなかったと思われるが、言語的、生活習慣的によく似たウズベク人に、在ウ

ズベクのウイグル人はすぐ同化しました。

三区やウルムチで長くウイグル語刊行物の出版に係わってきた私がカザフに定住できたのは、幸運でした。ウイグル語を使う知的労働の現場がカザフにはあったからです。

アルマ・アタでは、1960年から新聞『共産主義の旗〔コムニズム・トゥギ Communism tugh'i Gaziti〕』のウイグル語版で勤務しました。この新聞は1957年の創刊で、私が働いていた時は、カザフ社会主義共和国共産党中央宣伝部門が管理し、ソ連共産党の指導を受けていました。従業員17～20人の間で、総編集長はウイグル人。記者や編集員の多くはカザフスタン出身のウイグル人で、私のように1950～60年代に中国からやって来た者は、タタール人の私を含めて3～4人でした。地元出身者は皆、ロシア語が堪能でした。新聞が対象とした読者は、カザフスタンだけでなくソ連領内全てのウイグル人でしたが、記事内容はカザフスタン在住ウイグル人の情勢がメインでした。ソ連邦崩壊後、この新聞は『ウイグルの声〔Uyghur Awazi〕』と名称変更し、現在も発行されています。

『共産主義の旗』に就職した頃、ソ連の高等教育機関の卒業資格を得ようと、カザフ国立大学歴史学部の通信教育を受け始め、1970年に卒業証を取得しました。

1967年からはカザフスタン科学アカデミー下の言語研究所ウイグル語研究室所属となり、ウイグル語印刷出版物史を専門に研究を続け、1983年『ウイグル語ソヴィエト印刷物史〔Uyghur Sovit Metbu'atinin Tarihi Ерзин Мунир, Становление и развитие уйгурской советской печати, Алма-Ата:изд. \_Наука\_ Казахской ССР, 1988 〕』を出版しました。9～10世紀頃のウイグル人の印刷史に関する内容を書いた時は、日本の羽田亨教授の論文を読んで参考にしました。

研究所勤務となっても時々頼まれて新聞雑誌に記事を書いていたので、『共産主義の旗』、のちの『ウイグルの声』編集部は、私を今でも先輩記者として大切にしてくれます。

ソ連時代の1986年、カザフスタン科学アカデミーにウイグル学研究所が設立されると、1995年までそこで働き、定年を迎えました。設立時にウイグル学研究所は100人程のメンバーが居て、歴史・文化・経済・言語などの部門があり、それぞれを研究するスタッフがいました。しかし、ソ連邦が崩壊した後、ちょうど私の定年の頃には閉鎖となり、規模が大幅に縮小されて、東方学研究所の下部組織であるウイグル学センターに改編されました。人員は少ないですが、それでも研究員は皆一生懸命頑張っています。私が過去に所属していた歴史部門の、現在のトップである若手研究者アブレット・カマルディン〔ロシア語でカマロフ〕は英語が上手で、欧米の学会会議によく参加しています。

## ●アルマ・アタのタタール人

最後に、私の同胞、アルマ・アタのタタール人についてお話ししましょう。

アルマ・アタにタタール人が多く移り住むようになったのは、19世紀後半から20世紀初頭、この地がヴェールヌイという名で呼ばれていた頃に始まります。郊外に「タタール村」と呼ばれる集落ができ、タタール人の間で自発的な共同体や地域社会を形成する動きが見られ、文化や伝統、芸術の保持振興の機運も高まりました。セミレチエ州では1918年6月21日から『セミレチエ勤労者通報』というテュルク語新聞が当地のテュルク系民族のために発行され、タタール人ジャーナリストが刊行を担っていました。同紙は1918年12月9日に停刊となりますが、その後は『クメク [援助 Komek]』『ウチクン [火花 Uchqun]』といった新聞に受け継がれ、それらはカザフ語・タタール語・ウイグル語を混用する形で発行され続けました。

1930年代には農業集団化の嵐が吹き荒れ、そのなかでタタール人の学校や劇場など文化施設が閉鎖され、タタール人を含む諸民族の知識人・思想家や文化人が、弾圧で大勢殺害されました。

1955年以後アルマ・アタには、三区やウルムチ等から移住して来たタタール人が急増し、カザフスタンのタタール人総数は、1937年に92,000人だったのが、1970年には288,000人にも昇りました。1953年スターリンが死去し、フルシチョフがソ連の指導者となったこの頃のカザフスタンは、中国共産党の手中と化した新疆に比べて、経済も工業も急速な発展をとげつつあり活気に満ちていました。

タタール人社会の精神的な欲求に応えるうえで、最大の役割を果たしたのは、変則中学および正則中学教育であった。(この地の)タタール人子弟は「イブラギム・ガスプリンスキー記念学校」で教育を受けた。校長はムハラム・ビクブラートフだった。「ガブドゥラ・トゥカイ記念・文学サークルの夕べ」も、タタール人社会にとって特別な意義を持っていた。(自伝152-153頁)

アルマ・アタで「タタール文化センター」建設運動が起こったのは、ソ連最晩年の1987年で、センター建設は1989年10月2日正式に決定されました。そして1992年末、アルマ・アタ市立「タタール・バシキール文化センター」が発足し、館長にはグルジャ生まれのジャーナリスト、スプタイ・ハビブラフマンが就任しました。彼は私と同様、1950年代後半にソ連に移民し、1949年から新疆を脱出するまでの間、ウルムチの『新疆日報』編集部で働いていたと聞いています。設立からこんにちまで、経済的に成功したタタール人実業家たちが、センター運営を財政的に支援してくれています。

同センターでは、1994年3月1日に新聞『オメト [希望 Umud]』を創刊し、カザフスタンのタタール人に関する情報や、さらにはタタールスタン共和国についての情報を掲載することで、この地のタタール人の連帯に貢献しましたが、残念なことに財政事情から1995年5月に停刊しました。

（新聞の創刊にあたっては）『エゲメン・カザフスタン [主権カザフスタン **Igemen Kazakhstan**]』『アルマトイ・アクシャムイ [アルマトイの夜 **Almaty Akshami**]』『ウイグル・アワズィ [ウイグルの声]』『イェンギ・ハヤト [新生活]』の編集長たち～フルラン・アザラリン、エルガリ・サラット、ユルダシュ・アザマトフ～、それにアカデミー会員サルイク・ジマノフや、カザフ共和国ソヴィエト議員・長老のアフメト・バリエフなど、文化・芸術方面の錚々たる名士諸君が、同紙の刊行を祝福してくれた。（自伝155頁）

さまよえるタタール人は、タタール・バシキール文化センターによって、民族的・文化的な再統合のよすがを見いだしたのである。（自伝157頁）

2005年8月、タタールスタンの首都カザンで開催された「カザン市建都1000年記念大会」に、「タタール人のウイグル学研究者」として招聘され、出席しました。2007年にもカザンでは世界各地にいるタタール人学者を集めた大会が開かれ、そこでは漢語資料を基に「タタール」という言葉の由来についてスピーチしました。退職した今は、タタール人の歴史について研究する毎日です。

## ○おわりに～新疆のタタール人と、ムニール氏の口述について

最後に口述者の「民族的背景」について、解説しておきたい。

ムニール氏は、新疆生まれのタタール人ムスリムである。

タタール人とは、旧ソ連領のヴォルガ・ウラル地方から極東まで広範に居住するテュルク系民族で、一部の改宗ロシア正教徒を除き、多くはスンニ派ムスリムで、その民族形成については諸説あるが、近代ロシアではジョチ・ウルスの諸民族を指し、現在では狭義に「ヴォルガ・タタール（ロシアに侵入したキプチャク人とヴォルガ河中流域の民が混血して形成された民族）」を指す事が多い。

タタール人が新疆に居住するようになったのは、1881年清国と帝政ロシアが「イリ条約（ペテルブルグ条約とも）」を締結し、ロシア籍商人が清国領域内で商売する際に、特権が与えられたのを契機とする。交易を生業とする事の多いタタール人はこの時期、中国領、特に新疆へ流入した。その後1917年ロシア革命と1922年ソ連建国によって、商人で資本家であったタタール人は共産党による政治弾圧を恐れ、ソ連に戻らず、中華民国領に定住するようになる。

1944年の中華民国新疆省警務処統計によると、新疆の人口は約401万人。最大人口はウイグル人の約307万人（76%＊タランチを含む）。漢人は約22万人（5%）、タタール人は5610人（0.1%）である。この時のタタール人居住地分布は、イリ地区2246人、タルバガタイ地区2243人、ウルムチ地区598人、カシュガル地区44人、アクス地区21人、ホタン地区3人、コムル地

区6人等で、ソ連国境に近接する地域に集中している。

2000年中華人民共和国全国第5回人口調査統計によると、中国全土のタタール人は4695人で、民国期より大幅に人口減少している。1954～59年のソ連籍者帰国運動と、1991年ソ連崩壊で多くのタタール人が中国領からソ連（ロシア）に再移住したことが人口減少の理由であろう。

中央アジア現代史に於いて、タタール人はジャーディード運動（教育改革運動）などの担い手として活躍した。また、新疆のタタール人は、他民族に比べて比較的豊かな商人や高学歴知識人が多かったことも起因して、ロシアから交易品のみならず近代的な知識や思想やシステムをこの地にもたらし、「東トルキスタン共和国」時代も含めテュルク系民族社会全般の変革運動に重要な役割を果たした。

ムニール氏が「東トルキスタン共和国」について比較的冷静な口述や自筆記録を残せたのは、旧ソ連政府や中国政府から新疆「分離独立」の動きを巡って、現在に至るまで厳しい政治監視対象となっているウイグル人ではなく、タタール知識人であったことも起因しているのだろう。

文の末尾となるが、高齢にも拘わらず長時間語り続けてくれたムニール氏に、心から深謝したい。何度も問い返す不勉強な筆者に、根気よくご教示頂き、日本帰国後も電子メールで御指導頂いた。

また、ムニール氏のロシア語著作翻訳は、翻訳家金谷讓氏の協力を得た。ここに記して氏への感謝としたい。

- \* 本稿は、文科省科研基盤研究C「中国新疆に於けるウイグル人の反政府運動と在外民族組織との関連性についての研究」の研究成果の一つである。

Munir Ibragimovich Yerzin  
A Tatar Journalist from the “*Revolutionary East Turkestan News*”

Naoko Mizutani \*

**Abstract**

This is a Japanese transcription of a recorded interview with Munir Yerzin (b. 1927), a Tatar from the Xinjiang Uyghur Autonomous Region, People's Republic of China. Yerzin was born in Burqin (布爾津), in what is today Altay District, Ili Kazakh Autonomous Prefecture, Xinjiang. The interview is accompanied by an introductory preface and explanatory comments by the interviewer, a researcher of the modern history of Xinjiang.

As a result of his upbringing in Xinjiang, Yerzin is a polyglot who speaks Mandarin, Uyghur, Kazakh and Russian. He learned Mandarin in school, and Uyghur and Russian at work. His knowledge of languages led him to pursue a long-time career as a journalist and researcher in the region.

After finishing normal school (師範学校) in Dihua (迪化, now Urumchi) in May 1947, Yerzin was employed by the local *Xinjiang Daily* newspaper, but soon after resigned in August 1947 to move to Ghulja (Mandarin : Yili, 伊犁), to join the staff of the *Revolutionary East Turkestan* journal (Inqilabi Sharqi Turkistan Gaziti). The journal was an official gazette of the short-lived second East Turkestan Republic, which existed in the three northern districts (Ili, Tarbaghatai, and Altai) of Xinjiang Province in the Republic of China (ROC). Yerzin worked there as a reporter and Mandarin translator until October 1949, when the Chinese Communist Party (PRC) took de facto control of the three districts.

Under PRC rule, Yerzin worked at the *Ili Daily* (Ili Gaziti). As political turbulence gradually surfaced across Xinjiang, he became more worried about his future in China. Targeted in the course of the Three-anti and Five-anti campaigns in the early 1950s, he finally decided to leave Xinjiang and migrate to the neighboring Soviet Union.

In 1955, he and his family settled in Alma-Ata (now Almaty), Kazakh SSR (now the Republic of Kazakhstan). Yerzin successfully obtained a post in 1960 as an editor for the Uyghur language version of the *Flag of Communism News* (Communism Tughi Gaziti). He was subsequently transferred to the Uyghur department of the Institute of Linguistics under the Academy of Sciences of the Kazakh SSR. He specialized in the history of publications in the Uyghur language. Yerzin is the author of several works including *A History of Uyghur Publications in the USSR* (Uyghur Sovit Metbu'atinin Tarihi).

Yerzin's interview provides us with extensive and detailed information on an aspect of Xinjiang' history, that has so far received limited attention: how the official gazette of the

second East Turkestan Republic government, and the nature of relations between the media in the Three Districts and those in Xinjiang Province, ROC.

Yerzin's unique testimony offers a valuable contribution to the study of the modern history of Xinjiang, especially the role of the media.

### **Keywords**

Second East Turkestan Republic, Xinjiang, the *Revolutionary East Turkestan News* (Inqilabi Sharqi Turkistan Gaziti), Uyghur, Tatar

---

\* Correspondence to : Naoko Mizutani  
Lecturer / Faculty of Economics, Chuo University  
742-1, Higashinakano, Hachioji-city, Tokyo. 〒192-0393 JAPAN  
E-mail : QYH10040@nifty.ne.jp